宿命に抗いし反逆者　番外編

star

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宿命に抗いし反逆者　番外編

【Ｎコード】
Ｎ９７０３Ｖ

【作者名】
ｓｔａｒ

【あらすじ】
今回は本編と一緒になっていた番外編を別々に投稿しなおしました。これからは番外編はこちらで公開します。どうかよろしくお願いします。
騎士団だったり、軍人だったり、解放戦線だったり……シリアスだったり、ギャグだったり……ライが小さくなったり、カレンの性格が変貌したり……とにかく色々やっています！

番外編ＩＦ　学園祭（前書き）

騎士団ルートの番外編。神根島のあとです。

甘いライカレを書きたかった……感想いつでもお待ちしています。

番外編ＩＦ　学園祭

「ふぅ……けっこう歩き回ったな……」

今日はアッシュフォード学園の学園祭当日。

キュウシュウ戦役のショックもまだ癒えない中、学生達は青春を満喫するための努力は惜しまない。

会長であるミレイさんの影響もあるのだろうが……

黒の騎士団との両立は大変だったが、それでも生徒会役員としての貢献をして、当日を迎えた。

カレンと僕は生徒会の仕事の合間に学園祭を楽しんでいた。

一通り出し物を見て回った僕達は屋台をまわっていた。

「へえー、クレープもあるんだ……」

カレンが近くの屋台に立ち止まる。生徒達がクレープを焼いている屋台だった。

「食べていく？」

「うん！」

「それじゃ、クレープ二つお願いします」

「「毎度ありー」」

僕達は花壇のふちに腰を下ろすと、クレープを美味しそうに頬張りはじめた。

「カレンはクレープが好きなのかい？」

「うん！昔、お祭りの屋台でお母さんに買ってもらって……」

そう言うと、カレンはしんみりとした表情を見せた。

……おそらく、今もリフレインで苦しんでいる母のことを思い出したのだろう。

「……」

「大丈夫だよ、カレン」

僕は静かに声をかける。

「日本を取り戻すことだけじゃない。大切な人を守るために、また平和に過ごすために戦っているんだ。　……きっとまた一緒に暮らせる日が来るよ。言っただろ？　花は僕達が咲かせるって」

「ライ……」

「今は少しの平穏を楽しもう。クレープも冷めないうちに食べたほうがいいよ」

「うん」

カレンは気を取り直し、またクレープを口に運ぶ。本当に美味しそうに食べている。

「でも、あんまりがっつくと素がばれるぞ……」

「……あ……そうね……」

お嬢様モードに戻ったカレンはクレープを優雅な仕草で口に運んだ。

……ん？

「カレン、ほっぺにクリームが付いてるよ」
「え？」
僕は指でクリームをとってなめる。
「うん、甘い」
「ちょっ／／／／／」
「ん？どうかした？」
「な、なんでもない！！」
突然カレンが僕から顔を背ける……どうしたんだろ？　クリームがそんなに食べたかったのかな？
『生徒会よりお呼び出し申し上げます。カレン・シュタットフェルトさんは至急実行委員会本部へ来てください』
「あら、早速呼び出しだわ……残念だけど行かなくちゃ。ごめんなさい……」

「ああ……カレン、学園の生活もちゃんと楽しんでこうね！」

「！　……ええ！」

行ってしまった。

でも本当だ。たしかに僕達はブリタニアの血よりも日本人であることを選んだ。

それでも、学園の皆は大切な友達だから……

残された僕は、漫然と学園祭のざわめきの中を巡った。

このとき僕も、カレンも、誰も気付いてなかった。

この他愛のない日常の光景が……どれだけかけがえのない時間だったと言うことに。

……この平穏が長くは続かないということに。

番外編ＩＦ　学園祭（後書き）

作「ＤＯＧ　ＤＡＹＳの１１話を見て書きたくなった話です」

ラ「最後の文が気になるんだけど……」

作「それは本編の話だから特に気にしない。どんどん投稿します。感想いつでもお待ちしています！」

番外編　契約（？）（前書き）

気分転換に書いてみました。

ですが、ライ君はでません。

シリアスのカケラも無いギャグです。というかネタが……

1期の1話のネタです。

番外編　契約（？）

……なんなんだ、これは。

スザクも、俺をかばったこの子も……そして終わるのか、俺も？
何一つできないまま……こんなにあっさりと……ナナリーッ！

……！？　突然死んだはずの女が俺の腕をつかむ。

――――終わりたくないのだな？お前は――――

え？　なんだ？　……脳に直接声が響いてくる。

――――お前には生きるための理由があるらしい――――

……さっきの女か？　まさか、死んだはずなのに！？

――力があれば生きられるか？　これは契約。
力を与える代わりに私と契約して……魔法少女になってよ！
！――――

……は？

――だから、私と契約して……魔法少女になってよ！！！
――――

うん、どうやら俺もやけがまわったか。走馬灯どころかこんな幻聴が聞こえてくるとはな。
……なんだ魔法少女とは、俺は男だ！！　バカにしているのか！？

――――心配ない、女装すればなにも……！？　まずい、早く契約を！！――――

ふざけるな！本当だとしてもそんなふざけた力、望む理由など……「そろそろおしまいにしようじゃないか、学生君」……あったな。そういえば、確かに手段を選んでいる暇はなかった。

どんな力にしても……このまま何もできずに死ぬよりは……この茶番に付き合ってやったほうがましか。

いいだろう、結ぶぞ！！　その契約！！

今ここに、ブリタニア帝国に反逆する一人の魔法少女（？）が生まれた。

――――「ハドロン……ブラスターーー！！！」――――

――――「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」――――

……ちなみにブリタニア軍は魔法少女（？）の一撃により一瞬で滅ぼされたと言われるが、定かではない。

一方、時を同じくして、神殿のような場所に一人の男が立ち尽くしていた。

「がっはっはっはっはっはは！！　あやつ、やりおったか！！！」

９８代ブリタニア皇帝、シャルル・ジ・ブリタニア。
彼にとって息子の行動など、全てお見通しだった。

番外編　契約（？）（後書き）

作「公開はしている。反省はしていない。」

ル「逆だろうが！というか、文字が違う！！」

ラ「ルルーシュ…」

カ「C．C．…」

作「キャラが崩壊した気がした回でした。本当はV．V．のほうが口調があってると思ったんですけど……相手を誰にすればいいか分からなくて……これからもネタが思いつけば書いていこうと思います。」

「「「「また見てギアス！！」」」」

番外編ＩＦ　ライｉｎ神根島（前書き）

今回の番外編はライがブリタニア軍人で、神根島に一緒に飛ばされていたら……という話です。　あの現場に……ライがいたら……

番外編ＩＦ　ライｉｎ神根島

「う、……こ、こは……？」

目覚めてまず見えたのは辺り一面の海。
地形からここが島だとわかるが……どこだここは？　先ほどまで僕達がいた式根島とは違う場所なのか？

確かあの時、僕はユーフェミア殿下をお守りしようとして、ナイトメアから飛び出して、それから……それからどうした？
たしかシュナイゼル殿下の乗るアヴァロンからビームのようなものが飛び出したような……

「……まさか、その攻撃で僕は別の島まで飛ばされたのか！？」

……いったいどういう砲撃だ。相手を殺さず別の場所にとばすなど……武器としては未完成ということか。まあ、そのおかげで今回は助かったわけだけど……

なんにせよ、インカムも壊れて連絡手段が無い以上、なんとか生き延びる努力をしないと。

「とりあえず、滝があるようだし、水汲み場を確保しておこう」

僕は少し先に見えた滝に向かって歩き始めた。

……それにしても、ここに飛ばされたのは僕だけなんだろうか？可能性があるとすればあの時砲撃付近にいたゼロ、スザク、ユーフェミア殿下……そして、カレン。

（まさか彼女と戦場（こんなところ）で会うとはね…）

ある程度の予測はしていた。おとなしい彼女の性格が本来の姿ではないということも。

だけど、黒の騎士団にいるなんて思いもしなかった。まさか、僕が今まで敵対していた騎士団のエース、紅蓮のパイロットだったなんて……僕は、好きな人と戦っていたというのか。

「次会ったとき、どういう顔をして会えばいいんだ……『きゃあぁぁぁ！！』　！？　なんだ！？」

……悲鳴？　しかも今のは女性の声！　滝のほうからだ！　やっぱり僕以外にも誰かいたのか！

僕はすぐさま走り出し、悲鳴が聞こえた場所へ向かう。

「誰か居るのか！？　今の悲鳴……は？」

ナンダ、コノジョウキョウハ。

「ライ！？　君もここに？」

「え！？　……ライ！？　なんで？」

そこにいたのはスザクとカレンだった。いや2人がいたことは何も問題は無い。予想もしていたし。

……だが、この状況は……何だ？　本当に、どういう顔をして会えばいいんだろう？

カレンが裸で倒れている。水浴びでもしていたのだろうか、その体はぬれているように見える。

これだけでも問題なんだが……ヲイ、スザクキサマナニヲシテイル？

状況を説明すると、スザクは倒れているカレンの腕をつかみ、押さえつけていた。

というよりこれは……押し倒している？

ダレガ？　スザクガ。

ダレヲ？　カレンヲ……押し倒している！！？？

「ライ、良かった。君もここに……「死ね！」　……え？　がはっ！！」

あ、気がついたらスザクに飛び膝蹴りをしていた。まぁスザクだし、大丈夫だろう。多分死んでいないはず……はずだ。
おはなししたいこともあるから生きててもらわないと困る。それよりも……

「カレン！　大丈夫だった！？　一体スザクと何が！？」

「ライ！　あなたもここに！？」

「！！　ああ、いやそれよりカレン、あの、その、……は、早く服を着て！！」

「え？　……きゃぁぁぁぁ！！！」

いや、ごめんカレン。でも何もみてないから！！
……ごめん、嘘つきました。その、ちょっと振り向いたときに／／／／

「か、カレン！　僕はちょっとスザクと話をしてるから着替えてて！」

逃げたわけじゃないよ！　本当にスザクとおはなしするためだよ！

「いっつっつ…ライ何をするのさ。」

「枢木スザク、君を拘束する。容疑は婦女暴行罪だ！！」

「……は！？　なんで僕が！？　僕は何もしてないよ！？」

なるほど、あくまでしらをきるつもりか。反省する気もまったく見られない。

……いいだろう。カレンの着替えが終わり次第、話を聞くとしようじゃないか。

貴様の判決はその後に下す。

———それでカレン。一体何があったの？　君の悲鳴が聞こえたんだけど。

――――えっと……滝で水浴びしていたらスザクがやってきて、鼻息が荒かったから追い返そうとしたら、いきなり押し倒されて……それで、ぅっ、ライにあげようと思ってたはじめてを、ぐすっ、奪われて……

――――ちょっと待ってよカレン！！　僕は何も…

――――スザク、少し頭冷やそうか？

――――まってライ、僕の話も…ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

このとき、一人の男の断末魔が島中に響き渡ったという…

番外編ＩＦ　ライｉｎ神根島（後書き）

ラ「ライが命じる、スザクよ永遠の闇に…「ちょっと待って！！」…ちっ！なんだ？」

作「なんだじゃないよ！何勝手にギアス使おうとしてるの！？本編で使うかもしれないのに！！」

ラ「心配ない。どうせこれは見ている人がいるかさえ分からない、番外編のしかも後書き！本編にはなんの影響も無い。」

作「……！なるほど、じゃお好きにどうぞ。」

ス「じゃないでしょ！なんで許可するのさ！？」

作「言ったでしょ？私スザク嫌いだって。」

ル「…あれって本当だったのか…」

カ「というか…本当にスザクを連れてったんだけど…」

Ｃ「本編ではちゃんと復活するから何の問題もないだろう？」

カ「そういう問題！？」

作「まあスザクがどうなったかはライ君だけが知るということで…こんな感じで番外編も投稿していきます。ただ、番外編は『思いついたら書く』という形なので完全に不定期になります。本編もできるだけ早く投稿しようと思うので皆さん応援宜しくお願いします。

感想もいつでもおまちしています！」

「「「「また見てギアス！！」」」」

番外編　ＤＯＧ　ＤＡＹ（前書き）

今回の番外編……ライが目覚めます

話とは関係ないんですけど、ライとめだかボックスの行橋って似てません？顔とか髪型とか……通じる人いるかな？

番外編　ＤＯＧ　ＤＡＹ

「え……カ、カレン？」

なんだこれは？　なんだこの状況は？

扇さんに『すぐ来てくれ！！』って呼ばれてアジトにきてみたら……

「ラ、ライ……」

……カレンさん、その頭から生えている耳はなんですか？　そのお尻から出ているフサフサなものはなんですか？　まさか……尻尾？

可愛いんだけど！　破壊力抜群なんですけど！！

「えっと、カレン何の罰ゲーム？　なんでつけ耳なんてしてるの？」

というより……さっきから耳や尻尾が動いてるんだけど……僕が疲れてるのかな？

「え、えっと……これ、本物で……」

「……さて、誰ですか？　僕のカレンにこんなうらやまし……じゃなくてこんな酷いことして遊ぼうとしたのは？
早く前に出てきてくれます？　今なら少し痛いくらいで済ませてあげますよ？」

「お、おい待ってくれライ！　誤解だ！　話をひとまず聞いてくれ！！」

ーーー説明中ーーー

扇さんの話によると、カレンがアジトに置いてあった飲み物を何も知らずに飲んでしまった。
だけどそれはラクシャータが作っていた製品であり、飲むと一日中犬の耳や尻尾がはえてしまうという。

……は？　何を言っているんだこのアフロは？　ついに頭の中まで爆発したのか？　冗談はその髪の毛だけにしろ！！

「あの扇さん、言い残すことはそれだけですか？　もう死んでも悔いは無いですか？」

「あ～ら、本当よそれ」

「……ラクシャータ、本当にそんなもの作ってたのか？」

「ええ、最近騎士団の経営も厳しくなってきたでしょう？
そこでゼロが私に製品のアイディアを出してきたのよ。日本人・ブリタニア人両方に売れるだろうって」

……お前か！　ルルーシュ！！　君が元凶か！！
というかこれ売るのか！？　売れるのか！？　売れたら売れたらで問題なんだけど！？

だいたいルルーシュ、君は単にこれをナナリーに飲ませたかっただけじゃないのか！？
それで「もう、お兄様ったら！！」　とか言わせたかっただけじゃないのか！？

「……というより、なんであなたはこんなもの作れるんですか！？」
「あら、私はかつて『医療サイバネティック技術の権威』と呼ばれていたのよ？　これくらい朝飯前よ」

無駄なチート来たー！！　というかこれを朝飯前って……そんなことできるなら、その技術をもっと有効活用してくれ！！　ただでさえ僕らは不利なんだから！！

「ラ、ライ……私どうしよう。これじゃあ、学校にも行けない……」

……ああ、やめてカレン。そんな目を潤ませて見上げられるだけでもまずいのに、残念そうに耳や尻尾をしょんぼりしないで！！

「……でもこの耳とか触られたりすると分かるの？　感覚あるの？」

ためしにカレンの耳を触ってみる。

「！！？？　ふあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

「……え？」

「ああ、言っとくけど耳や尻尾の部分は普段より敏感になってるわよ～」

……え！？　なにこれ！　かわいい！！

「……じゃあ、尻尾も？」

「！？　あああああぁっっっっ！！！　ラ、ライィィィ！！」

……Ｇｏｏｄ　Ｊｏｂ．　ルルーシュ、ラクシャータ！！

「両方触ると……」

「や、やめてライ……私おかしくなっ……！！！　あああぁぁぁぁあ！！！」

これは売れる！！　間違いなく売れる！！　少なくとも僕なら買う！！！

「……ラクシャータ、これあまってたりする？」

「今手元にあるのは２０～３０くらいよ？」

「……２、３個くれ。」

「あぁぁ……はぁぁ……ラ、ライィ…？」

「とりあえず部屋に逝こうか？カレン」

「い、行くの字が違っ！！！　あああぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

ここだと他の人に見られちゃいそうだからね。遊ぶなら二人っきりのほうがいいし……たっぷりかわいがってあげよう。こんな機会めったにないし……というかないし。

―――その日、アジトからは騎士団のエースの絶叫が終始響き渡ったと言う……

番外編　ＤＯＧ　ＤＡＹ（後書き）

作「ギアス風にタイトルをつけると、『Ｓが目覚める日』です（笑）」

ル「……ライの性格かわりすぎじゃないか？」

カ「あ、ラ、ライィ……」

ラ「いい子だねー、カレン。尻尾ふりふりしちゃってかわいいよ、たっぷりなでてあげる」

Ｃ「……まだやっているが？　止めなくていいのか？」

作「止めたらこっちが酷いことになる！！　だから放っておいて！」

ル「しかし、これはコーネリアとかもユフィに使うんじゃないか？」

Ｃ「お前もナナリーに使ったしな」

作「まじで使ったの！？」

Ｃ「目が見えないことをいいことにな。写真だけでなく映像も撮っていたぞ？頭をなでられて、うれしそうに尻尾を振っていたりとか……」

ル「あの時は本当に世界なんてどうでも良いと思った……」

作「思わないで！！　本編が終わっちゃうから！！」

C「……だが、本当にネタが思いつかなかったときは『これを全世界にばら撒き、人々にとって戦争などどうでもよくなった』……みたいな感じでいいんじゃないか？」

作「……なるほど！！」

ル「なにが『なるほど』だ！！　そんなことしたら感想どころが苦情が殺到するわ！！」

作「やっぱり駄目か…わかりましたよちゃんとできるかぎり完結させますよ」

C「まぁ当然だな」

作「このような作者ですが、できれば最後までお付き合いください。感想はいつでもお待ちしています。ではまた次回に！」

番外編　穏やかな夢の中で……

以前の本編の感想で、ラハールさんより番外編のアイディアを頂き、作ってみました。

時間軸は……Ｒ２の騎士団が中華連邦に入ったところです。

すみません！　手違いで消してしまい、バックアップも取っていなかったので内容が前と少し変わっています。
こんなことが無いように注意いたします！　本当に申し訳ありませんでした！

番外編　穏やかな夢の中で……

9／13

―――中華連邦―――

黒の騎士団が中華連邦に入って早三日。騎士団のトップ、ゼロは仕事に追われていた。

軍の編成、ナイトメアの配備、新幹部の選抜、更には共に移住してきた日本人百万人の生活への対処など、あげればきりがない。

だが、騎士団には政治能力が高い人間は少ない。ゆえに前者はともかく、日本人への対処などは政治能力が高いゼロ・ライ・ディートハルトといった限られた人間が行っていた。

当然のことながら、仕事が多くなるわけで彼らの負担も大きくなる。

「ゼロ、僕だ……書類を持ってきたぞ」

「……ああ。入れ」

ゼロの許可を得、ライが入室する。ライの顔にも疲れが見える。彼もここ三日間徹夜が続き、疲労が溜まっているのだ。
実を言うと、仕事の量はライの方が多かったりする。彼は騎士団のエースパイロットであり、ラクシャータによるナイトメアの実験にも付き合わされたりするのだ。

……だが、疲労だけではない。彼の場合、人間に必要とされる三大欲求が足りていない。

仕事が忙しいということで、睡眠時間が1日1時間。食事は3食レーション。恋人のカレンは紅蓮の整備・隊長の仕事が重なってほとんど会えていない。ゆえに恋人との蜜月などまっったくない。

ゆえに……体力的にも、精神的にも大変やばい状況になっている。団員の報告によれば、書類処理中に「カレンがいない。カレンが足りない。カレンが欲しい。カレンカレンカレン……ｅｔｃ」と呟いていたという

……危険すぎる。このままではライが色んな意味で病んでしまう。

事実、以前Ｃ．Ｃ．にライに何か食べたいものがあるかと聞いた時でさえ、
「カレンが食べたいカレンが食べたいカレンが食べたいカレンが

……ｅｔｃ」

……もはや末期だ。そろそろ狂王が目覚めてもおかしくない。

「ライ。お前は今日はもう休んでいい。急を要する仕事は終わった。カレンも今日は予定は入っていなかったはずだ」

「……そっか。じゃあ、お言葉に甘えるとするよ」

ライも了承し、部屋を出て行く。普段の彼なら了承しなかったかもしれないが、よほど疲れていたのだろう。

カレンが若干危険な気がするが……まあ大丈夫だろう。多分。

「……そういうお前は大丈夫なのか？　ルルーシュ」

「大丈夫なわけがないだろう……俺も少し休む。扇たちが来たら起こしてくれ」

Ｃ．Ｃ．に後のことを任せ、ルルーシュは仮面をはずしベッドへ

と向かった。彼も相当疲労が溜まっていたのだろう。

「ああ、そうだ。ルルーシュ、寝るならこれを飲んでからにしろ」

「……なんだそれは？」

C．C．は懐から何かを取り出す。粒上の薬のようなものだった。

「ラクシャータが作った睡眠薬だ。即効性だし、すぐに眠れるはずだ」

「……変な薬ではないのだろうな？」

「心配するな。私がお前にとって不利益なことをするはずないだろう？」

ルルーシュは少し考えこんだが、結局C．C．から薬を受け取り、飲み込んだ。

2・3分ほどで、ルルーシュから寝息が聞こえてきた。

そしてC．C．はルルーシュの寝顔に近づき、その頭を撫でながら呟いた。

「ゆっくり眠れ。せめて夢の中だけでも、穏やかに過ごすといい。
お前も、大切な人ととの一時を楽しんでこい」

そのときのC.C.は魔女と呼ぶにはふさわしくない、慈愛に満ちた優しい笑顔をしていた。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「……ん？　ここは……どこだ？」

ルルーシュはゆっくりと体を起こした。徐々に脳が覚醒していく。
そして、目の前の光景に驚愕した。

「……まさか、アリエスの離宮！？　なんで……夢なのか、これは……」

そう、彼が寝ていたのは彼が幼少時代をすごしたアリエスの離宮の庭園だった。
本来ならばもう戻ることのない……戻ることのできない場所だった。

「お兄様！　目が覚めましたか？」

「！　ナナリー……！？　お前、目が……足も！」

「？　何を仰っているのですかお兄様？」

ナナリーが近づき、その姿を確認してルルーシュはさらに驚愕する。
閉ざされていた瞳は開かれ、歩けなくなっていたはずの自分の足で立っていた。

「もう、お兄様ったら酷いです！　今日はせっかくの休みでお兄様と一緒に遊べる日ですのに。

最近はただでさえ、お兄様も忙しいからこうしてゆっくりできる日を、私は楽しみにしていたんですよ？」

「……あ、ああ。すまないナナリー」

「今日は、ずっと私のお相手をしてもらいますからね、お兄様」

そう言って、ナナリーはルルーシュの手を引いて歩き出す。

「（……そうだ、これは夢なんだ……）」

現実ならばありえないことの連続。それでも彼は喜んでいた。夢であろうとも、ナナリーが自分の足で歩き、自分の目で世界を見ることができるのだから。

ルルーシュは現実を忘れ、この穏やかな時を楽しむことにした。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

……どれくらいの時間がたっただろうか？
ルルーシュとナナリーは二人っきりの時間を過ごしていた。幼少期のように、ナナリーが無邪気に走り回ったりした……それだけでも、ルルーシュの心を満たしていた。
今は二人でゆっくり紅茶を飲みながら、何気ない会話を楽しんでいる。

……だが、夢というものは所詮夢でしかない。

「……ナナリー、これは夢なんだろ？」
「？　お兄様？　どうしたんです急に」

兄（ルルーシュ）の突然発した言葉に妹（ナナリー）は疑問を持った。

「俺達は皇帝に捨てられ、日本に人質として送り込まれて、今も一緒にいることさえできない……そんな俺達が、ここでこんなにも平和に過ごせるわけがない」
「……」

「俺は、お前が安心して過ごせる世界を作るために今も戦っている。本当だ。
ライ達も、想いこそ違っても俺に協力してくれる……でも、それはこんなに簡単に叶うものではないんだ。叶っていいものではないんだ」

兄は妹に自分の想いを打ち明けた。紛れもない彼の本心。それはゆるぎなく、重いものだった。

「……お兄様。確かに私は優しい世界が欲しいと言いました。ですが、それ以上に欲しいものがあるんです」

「……なんだい？」

「お兄様です！」

「……え？」

ナナリーはイスから立ち上がって言った。

「私はただお兄様と一緒に過ごせればそれでよかった。お兄様やライさん、スザクさん、カレンさん達と一緒に笑い合って過ごせた場所……あれこそが私にとっては優しい世界でした」

「……」

「私は、お兄様が傍にいてくれればそれでよかった。ただそれだけでよかったんです」

「……だが！　戦わなければその世界も守れない！　お前の傍にいることもできない！
この世界は、俺達が安全に過ごすことなんて許さないんだ！」

「お兄様の気持ちは嬉しいです。私のことを想ってくださって……
でも、私のために傷つかないでください。
お兄様が私のことを大切にしているように、私もお兄様のことが大切なんです。ライさんやカレンさんだって、そう思っているはずです」

「！！」

「忘れないでください。お兄様が私を想ってくださるように、私もお兄様のことを想っています。
今でこそ会うこともできませんが、私はまた皆で笑いあえると信じています」

「ナナリー……」

「お兄様は一人ではありません。会えなくても心だけは繋がっています。ですから、私のために苦しまないでください」

「ごめん……！」

ルルーシュはナナリーを抱き寄せた。彼女に見えないように背中で涙を流している。

ナナリーはそんな兄に何も言わずに、支えていた。

「……もう少しだけ、このままでいさせてくれ……！」

「はい、お兄様……」

ぬくもりを共有するように二人は抱き合った。

夢であっても、この二人の気持ちに変わりはない。

これが現実にできるようにと思いながら、ルルーシュの意識は少しずつ薄れていった。

番外編　穏やかな夢の中で……

作「なんだかんだで、ルルーシュメインの番外編は始めてだった……かな？」

ル「ナナリーにも思うことはある。だけど、俺のことも思っていてくれたなら、それだけでもわかればいい。それだけわかればまだ戦える」

作「実際複雑ですよね。妹のために戦ってその妹が敵になってしまうんですから。
ラハールさんどうだったでしょうか？　不自然だったら言ってください。
ライカレは……ネタが出てこない！！　ルルーシュはすぐ出てきたんですけど……」

番外編　ある夏の一日（前書き）

この暑さでおかしくなったようです。

今回の時間軸は一期です。

番外編　ある夏の一日

「……暑い」

「本当に、何なのよこの暑さは……」

現在の日本の季節は夏。

だが、今年は例年とは比べられないほどの猛暑となっていた。

平均気温は３０℃をゆうに超え、北海道でさえも３０℃を超える日々が続いている。

当然、騎士団アジトも例外ではない。

この暑さには、歴戦の猛者たちでさえも参っていた。

しかも、今年は暑さだけではない。まれに降る突然の豪雨。街は冠水し、身動きが取れないときもある。

暑さだけでなく、こういった街の対策のためにブリタニア軍もまともに動けずにいた。

『しかしこの状況が続くのは良くないな。幹部がこれでは、団員の士気に関わる。
ここは一つ、幹部内で催しをするか……』
ゼロが何かをひらめいたか、自室に戻っていく。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――二日後―――

「……で？　ゼロ、今日はどうした？　いきなり幹部を呼び出して……」
『よくぞ聞いてくれたライ。
今日は皆の士気を取り戻すため、私は今ここに、料理大会を開催することを、ここに宣言する！！！』

ゼロが自慢のポーズを決めながらも、高らかに宣言する。

「……なぜ料理？」

『料理を甘く見るな。美味いものを食べることで我々は心身ともに癒されるものだ。
そこで今日は女性幹部達に料理を作ってもらった！
君たちは審査員だ。美味しいものを食べ、どれが一番美味いかを決める』

「あ、それでカレン達はいないのか」

ライの言うとおり、カレンや千葉、C．C．と言った女性幹部の姿が見えない。
今、最後の準備をしているところらしい。
ちなみに神楽耶は料理をほとんどしないということで不参加らしい。

「でもなんで女性幹部だけなんだ？」

『考えてもみろ……まともな人材がいないだろう』

「……そうだったな」

四聖剣の一人、朝比奈は醤油マニア。
コーヒーやスイカ、しまいにはプリンといったものにまで醤油をかけるほどの醤油好き。
「醤油は万能の調味料」と豪語する彼には『醤油マスター』の称号を与えよう

同じく四聖剣の卜部は大の虫好き。
以前ライにトンボの食い方を教えたりもした。

他の者達はまったくと言っていいほどできない。
藤堂は軍人時代のサバイバル料理なら慣れているが、今回は向いていない。
ライやゼロは作れるが、「それならば女性だけにする」ということになった。

「司会は私、ディートハルトとゼロ、そして仙波隊長でお送りします」

「よろしく」

ディートハルトと仙波が姿を現す。
なぜかすでに机などが設置されていた。

『そして優勝者には！！
この小説【宿反】で、これから先の出番が二倍になる権利を与えよう！！』

「「「ちょっと待てーーーー！！！！！」」」

『……ん？　どうした？　君たちも出たかったか？』

「違う！　問題はそこじゃない！　なんだその権利は！？
それではこれから先の物語に影響するだろう！　大体この番外編の時間軸一期だぞ！？
二期の途中から突然出番が増えるっておかしいだろ！！」

『問題ない。それは作者が何とかする。
それに、心広き読者達なら許してくれるだろう……多分』

「多分って！　多分って言ったよな、今！　いいのか！？　大丈夫

なのか！？」

「気にするなライ。この暑さで、どこぞのバカが更にバカになったんだろう」

C．C．が何かを悟ったかのように呟く。

……はい、おかしくなりました。いや、おかしくならない方がおかしくないですか？

「？　C．C．、なぜここに？」

「私の料理は仕上がった。様子を見に来たんだが……やはり混乱しているな。
ま、後のことは気にせず、お前達も楽しめ」

「……いいのか？」

『その通りだ、細かいことは気にするな！　結果は全てにおいて優先する！
……では、準備ができたようだ！　まずは一人目……千葉！！』

ゼロの言葉と同時に、千葉が料理を運んでくる。

千葉の料理は……そばだった。天ぷらもついている。
暑い夏には丁度いいだろう。

「うん、これは美味い」

「暑い夏には丁度いいな」

「今回は仙波大尉にもそば打ちの協力をしてもらいました。
天ぷらも先ほど揚げたばかりですので、どんどん食べてください」

「あ、それで仙波大尉は審査員から外れたんですか」

公平性を保つために、協力した仙波は外されたということだ。
ちなみに料理はちゃんと司会の者達にも配られている。
千葉のそばはなかなかの好評。藤堂も気に入ったようだ。

『ではどんどん行ってみよう！　次は……井上！！』

「はい！　私はこの夏を乗り切るために、スタミナ料理を用意しました！」

「スタミナ料理ですか……」

スタミナ料理と言えば、焼肉やうなぎ、カレーといった食べ物だろう。

なんにせよ、先ほどの千葉とは正反対だ。

「何品か用意したので皆どうぞ！」

「？　（何品か？　普通こういうのって主食だけじゃ……）」

「赤まむｓｈ「アウトォォォォォ！！！」

「な、何で！？」

「何でじゃない！　何ですかこの料理の数々は！？　もう最初の時点でアウトですよ！？

一体あなたは僕達に何のスタミナをつけるつもりなんですか！？」

「でも……精力がつくって思って……」

「たしかにつきますよ！？　でも精力ってそっちじゃないでしょ！？」

「扇や玉城は食べてるけど？」

「何で普通に食ってんだ、あんたらは！？」

扇や玉城と言った面子はすでに食べ始めていた。
その表情には何の迷いも見られない。

「い、いや。せっかくだし、さ」

「そうだぜライ。俺たちだって疲れてるしさ」

……疲れてたそうです。昨夜の一戦で疲れているそうです。

「大体ライ君もそういう経験がないからよ……なんなら今夜私が、
「井上さん？」……」

「……カレンいつから？」

「そろそろ終わりでしょう？　さっさと戻ったらどうですか？
それとライの相手なら私が勤めますので、どうぞ戻ってください」

「……っち！」

舌打ちをして井上は戻っていった……本気だったのだろうか？

「えー、ハプニングがありましたが次に行きましょう。
次はラクシャータ！　……だったのですが、彼女は飛ばさせてもらいます」

「なぜ！？」

「……女体盛りだったそうです。」

残念ながらこの小説はそういうのは描写しないようにしています。
なので彼女は飛ばさせてもらいます。

「致し方ない。次はC．C．だったかな？」

「そうだ私だ。感謝しろ、お前達のために私が料理を用意してやった」

「……君って料理できたのか？」

「愚問だな。見ろ！

これが私の料理……ピザだ！！」

『「やっぱりか！！」』

C．C．が用意したのは何を隠そうピザだった。
さすがはピザ女と呼ばれるだけのことはある。ゼロとライの心が今までで一番シンクロした。

「やっぱりとはなんだ？　私が普段愛用しているピザハット注文の品だぞ？」

「しかも自分で作ってない！」

「ふむ……たまにはこういうのも悪くないな」

「そうですね。租界ではこんなのめったに食べませんからね」

「そして高評価！？」

ピザをめったに食べない藤堂や朝比奈、卜部といった者達には好評だった。

『……こんな形でよかったのだろうか？』

「まともなのが千葉のくらいしかありませんな」

「で、ですがまだ最後に一人残っています！
最後は双璧の一人！！　紅月カレン！！！」

遂に最後の砦、カレンが登場。

「私の料理は……豚肉の冷しゃぶサラダ！」

ゆでた後、冷やした豚肉。
皿にはレタスやスライスしてあり、水にさらした玉ねぎも盛ってある。
しかも、ポン酢醤油やごまだれ以外にも、ドレッシングが用意された。

……最後の最後で本格的料理がやってきた。

「うん、美味い！」

「さっぱりしてるね」

「これなら食えるな」

「ハッハッハ！　カレンもこんなの作れるとはギャバ！？」

これには皆も満足げ。

変なことを言おうとした玉城にはカレンの鉄拳が落ちた。

「カレン、君のことは信じてたよ。好きだ愛してる！」

「うん！　ありがとうライ！　（咲世子さんに教えてもらってよかった！！）」

……実を言うとカレンは二日前から咲世子に料理を教えてもらい、メニューも決めていた。

本当に手際のいい女である。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

『それでは皆の投票も終わったし、結果発表と行こう！』

ゼロがステージに上がる。
結果を伝えるために……

『優勝は……

井上だ！！　おめでとう！！』

「なんで！？　カレンじゃないの！？」

『……扇や玉城といった者の票が集まった。』

結果：

千葉……藤堂、卜部

井上……扇、玉城、杉山、南、吉田

C．C．……なし

カレン……ライ、朝比奈

井上がダブルスコアで快勝した……

「これでいいのかよーーーーー！？」

戦闘隊長の叫び声がむなしくアジトに響き渡った。

だが今回の件以降、幹部の士気は上がっていったことは間違いない。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

ああ、言い忘れていたがお前の優勝商品『宿反出場権利が２倍』はなくなった。

なんで！？

お前はすでに本編では死んでいるからな。
０を二倍しても０にしかならない。

そ、そんなのって…………

番外編ＩＦ　分かり合えぬ者達（前書き）

日本解放戦線ルートのＩＦです。最後の会談にゼロだけでしたが、カレンがいたら……

簡単に日本解放戦線ルートの説明をしますと、

ライ、騎士団入団

↓ナリタの戦い。一般人を巻き込み、日本解放戦線を見捨てるよう指示したゼロに疑問を持つ

↓カレンの追跡を振り切り、騎士団を脱走。解放戦線では歓迎され（ギアスを使った）少尉の位を得る

↓各地を転戦。藤堂や四聖剣とも合流し、実力を認められる。月下を入手

↓ブリタニアとの決戦の際、前線では勝っていたが、片瀬が本陣が襲撃を受けたという理由で撤退

↓片瀬に日本で戦い続けるよう進言したが、受け入れられず、片瀬は藤堂・四聖剣・ライを追放する

といった感じです。この話は追放されてからの話です。

番外編ＩＦ　分かり合えぬ者達

結局、片瀬少将は最後まで藤堂さんや僕の意見を聞き入れず、僕達は解放戦線を追い出された形になった。

藤堂中佐と四聖剣、僕。たった６人の軍隊だ。

中佐を慕う将兵も多かったが、軍隊という組織の中、命令を無視することは難しい。ごく少数の者が従ったが、ナイトメアは６機の月下だけとなった。

今後の行動のため、僕はキョウトに当面の支援を得られるよう打診した。皇家の血筋をひく僕がいれば少しは役だつだろう。

そして、フジヤマプラントで僕達を待っていたのは……

「待ちかねたよ」

「！？」

「ゼロ……」

「支援態勢のことでお話していたのですが、ぜひ皆様に合いたいと

……」

神楽耶様……よりにもよって、こんな時に……！

「話は聞いている。いよいよ片瀬に愛想を尽かしたようだな……」

「……」

「あの時の言葉、こんなに早く実現するとは思わなかったが……」

「『互いの力が必要ならば』、か？」

「そう。もともと私は君達の力を欲している。あとは、君達次第ということだ！」

「うむ……」

「ライ……君にも異論はなかろう？　我々黒の騎士団に合流することに」

中佐と会話をしていたゼロが突然僕に話題を振る。

たしかに元騎士団団員であり、現在は解放戦線に所属している僕に同意を求めるのは有効なのだろう。事実、僕の意見によって中佐

も今後の方針を決めることになる。それだけの信頼を僕は得た。

だけど……

「ライ、お願い。私、貴方となら……」

カレン……君は今でもまだ一途にゼロを信じているのか。だけど、僕は……

「悪いがゼロ、君を信用することはとても出来ない」

「ほう……意外と執念深い男だな」

「ライ……！」

「僕自身の事じゃない」

「なんだと？」

「……ゼロ、君にひとつ質問をしたい。このことだけには、嘘偽り無く答えてほしい」

「……いいだろう」

やっと聞ける。確かめられる。
真実を、君の本質を……君の目的を！！

「あの時……」

思い出されるのは、突然目の前で爆発が起きた光景。ポートマンの大破とは別の爆発。

「片瀬少将が国外脱出を図ったとき……タンカーを爆破しようとしたのはゼロ、君じゃないのか！？」

「……」

「え！？」

「タンカー？　……まさか、あの時の爆発が……！？」

ゼロは何も答えない。カレンは……何も知らなかったのか……？
ゼロの独断だったのか？

千葉中尉は何事かを中佐に耳打ちする……千葉中尉も気付いたのだろう。
あの時の、タンカーを狙った爆発について……

「あの時、解放戦線のタンカーの進路上に爆弾が仕掛けられていた。
僕がちょうど同じ方向にいたポートマンを破壊しなければ……僕も片瀬少将も、いや解放戦線はあの場で終わっていた」

「……」

「国外脱出を図った解放戦線に爆弾を仕掛ける理由はない。ブリタニア軍も同じだ。そんなことするくらいなら、最初から空爆で終わりだからな。
……そうすると、あの爆弾は第三者の介入によるもの。そして、あの爆弾の爆発と同時に、ブリタニア軍本陣に攻め入った黒の騎士団……随分出来すぎた話だと思わないか？」

そう、普通ならありえない。騎士団が……いや、ゼロが爆弾を仕掛けない限り！！
ゼロが解放戦線を囮として、ブリタニア軍を攻めようとしない限り！！

「ゼロ、君に聞きたい。君の目的は日本の解放ではないな？」

「……」

「君が求めるのはあくまで自軍、黒の騎士団の勝利！
だからこそ一般人を、味方をも巻き込むような作戦さえも実行できるんじゃないのか！？」

「……」

「僕はそれを許せない！　……どうなんだ、ゼロ！？　答えろ！！」

「……答える必要はないな」

「そうか……」

「ゼ、ゼロ……それじゃあ本当に……」

どうやら本当に、ゼロの独断だったようだな……もっとも、あの

メンバーがこんな作戦に賛同できるわけがないか。

「中佐、そして四聖剣の方々。私などが勝手に話を進めてしまい、申し訳ありません。
ですが……自分はゼロを信用できません。もし、中佐が騎士団に合流すると仰るならば……申し訳ありませんが、私は中佐達と道を同じくすることはできません」

「……いや、少尉。むしろ良く言ってくれた……ゼロ、今回も君の申し出に応えてやることはできないようだ」

「……！」

「まあ……力を合わせてはもらえないので？残念ですわ……」

「……申し訳ありません、神楽耶様」

それでも、僕はゼロとは……分かり合えない！！

「ラ、ライ……私は、私も貴方と……」

「……カレン、君は騎士団にいるべきだ。」

「え！？」

「日本の解放を望むのならば、君は迷ってはいけない。日本解放の近道は騎士団であっているんだから。

……それに、君には扇さん達を討てないだろう？　今まで仲間だった人たちを」

「！！」

……さようなら、カレン。たぶん、初恋だった……

「ライ……」

「……」

「次に会うときは……恐らく」

「そうだな……覚悟はしておくよ」

「……」

僕達はもう、戦場で向き合うしか……ないのだから……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

狂王は破滅の道を歩むことになろうとも、魔王と進むことを善しとせず、

紅蓮の騎士は愛する者と戦うことになろうとも、日本開放の道を行く。

舞台はこのまま決戦の地、九州へと移ってゆく。

そしてこの戦いこそ、歴史上「日本解放戦線」の最後の戦いとなる。

番外編ＩＦ　分かり合えぬ者達（後書き）

作「愛し合いながらも戦い続ける二人……これなんてロミジュリ展開？」

ラ「……」

カ「……」

作「実をいうと、この話から作って中華連邦ルートにしようかと最初は思っていました。ですが、カレンがほとんどでてこない、この内容だとＢ．Ｒ後の騎士団員（主に旧解放戦線とカレン）の反発が大きいなどの理由で無しにしました」

ル「……そうだな。このままでは内部分裂が起こりかねない……」

作「珍しく番外編でシリアスになってしまいました。ネタが思いつけばこれからも番外編も書いていこうと思います。これからもよろしくおねがいします！感想いつでもおまちしています！！」

番外編ＩＦ　カレン、無双（前書き）

アニメの最終回で、ライが皇帝についている設定です。

ただ……短いです。とても短いです。

短編というか……ねたというか……

本編もここまで書き続けたいです。

番外編ＩＦ　カレン、無双

フレイアが飛び交う戦場の中、次々とブリタニア軍を単機で蹴散らしていくものがいた。
黒の騎士団のエースとまで呼ばれた戦士。その名は……紅月カレン！！

「恋人でも無ければ愛人でもない！　恋心のカケラも持っていない！！　告白する理由の無い奴は……引っ込んでいろ！！！」

……哀れブリタニア軍。彼らは恋する乙女のため、次々と犠牲になっていった。

……ちなみにブリタニア軍の９割強は男である。八つ当たりであることこの上ないが、カレンはそんなこと知ったことではない。彼女の目の前に現れるのは全て、彼女の恋路を邪魔する敵なのだから。

いや、彼らはそんなつもりは全くないのだが、どうやらブリタニア軍がわざわざオープンチャンネルで『ライ皇帝陛下の為にーー！

！』と連呼したことで勘違いしたらしい。

彼女曰く『私の恋路を邪魔をする奴は、紅蓮に蹴られて死んでしまえ！』

……カレンさん。それ、本当に死にますから。

すでに彼女の前に百機以上撃ち落とされた。まさに百人斬り……

いや、斬ってない相手もいるけれど……

「理由ならできた。約束が……」

そんな彼女の前にC．C．が立ちはだかる！彼女の新しい機体、ランスロット・フロンティアと共に……

「それってライが好きってこと！？」

「！？　……さぁな、ただ……（性的な）経験という積み重ねはもうお仕舞いにしようと思ったんだ」

かつては仲間同志で、親交もあった二人。その二人が今、一人の男をかけて（あとついでに世界をかけて）、全力でぶつかり合う！！

「人間らしいこと言うのね！」

「……！　さすがは……！！」

……だが、カレン（と紅蓮）の圧倒的な強さになすすべも無く、C．C．までもがどんどん追い込まれていく。

もはや彼女の勢いはとめられるものではない。

「カレン、お前の勝ちだ……」

「どうでも良いよ、そんなこと……じゃあね！」

C．C．はかろうじて脱出に成功した……今またC．C．も敗れ

た。彼女を止められるものは居るのだろうか？

次回、ライを守る盾、彼の騎士がカレンの前に立ちはだかる！！！

番外編ＩＦ　カレン、無双（後書き）

ラ「これ続くの！？」

作「いや、続かない。スザクとカレンの対決でネタは思いついているんですけど……伏字ばっかりで投稿できない……」

ル「なんだその内容は！？」

作「カレンとスザクが対峙し、スザクが『俺とルルーシュは……ライとヤラなければならない！』　とか言っちゃって……カレンもそれに対抗して……ついには伏字ばっかりに……」

「「……」」

作「はい、本当にすみません。続くみたいなこと言ってこの番外編は続きません。これでお終いです。」

番外編　目が覚めたら……（前書き）

時間軸は1期。式根島～行政特区あたりです。

番外編　目が覚めたら……

―――騎士団アジト―――

「う～ん、よく寝た」

ここは黒の騎士団アジト。昨日はゼロに頼まれた仕事の処理やラクシャータの実験に付き合わされて、深夜になっちゃったからアジトに泊まっていったんだ。

ゼロが『今日はご苦労だった。私の個室を使っていいからここで休んでいくといい』というから、思わず寝ちゃったんだよな。どうせ今日は日曜で学校も休みだから都合がよかったし。

「……ひとまず、顔を洗おう」

背伸びをし、ベッドからでようとした。でようとしたんだけど……ん？

おかしい……服が大きい。腕も足も服から出てこない。というよ

り……なんだか僕、小さくなってないか？
いや、疲れているんだろう。僕は顔を左右に振り、顔を洗うために洗面所へと足を運んだ……歩くのも一苦労なんだけど……

そして、体全体が見える僕よりも大きな鏡を見た瞬間、僕の思考はとまった……（゜Д゜）ぽかーん

「なっ……なんじゃこりゃ～～～！！！！」

思考回路が動き出しての発した第一声がこれだった。朝のアジトに僕の声が広がっていった。

「なんだ、うるさいぞライ」

「……C．C．……」

同じ部屋にいたC．C．が今の叫びで起きてきた。
まだ眠いのだろうか、目をこすっている……その薄着はどうにかしてほしいんだけど。

「……誰だ？」

「いや、僕は……」

「……まさかライのやつ、もうカレンとしたのか？」

「違う！　とういか、歳があわないだろう！」

C．C．のボケに思わず突っ込んでしまった。
今の僕の見た目はだいたい5～6歳くらいだった。つまりは幼稚園～小学生くらい。思わず昔を思い出してしまう。
……まあだから、どう考えても歳が合わないわけだ。大体カレンと出合ったのが今年だし。

「本当に、ライなのか？」

「うん」

「なぜこうなったか心覚えは？」

「……ない。朝起きたらこうなっていた」

「……わかった。とにかく騎士団幹部を集める。お前がいなければ戦力の低下も著しいからな」

「頼む」

今の僕はなぜか声まで高くなっているし、僕から連絡しても信じてもらえないだろう。
とりあえずC．C．にこれからのことを頼み、僕は何か着れる服を探すことにした……アジトに子供の服なんてあるかな？

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――ルルーシュside―――

「ふう。今日は久しぶりの休みか」

今日は日曜。学校は休みだし、コーネリアも北陸の制圧のためにそちらに向かっているため騎士団も今日はほぼ休み。
油断はできないがディートハルトに、もしなにかしら動きがあればすぐに伝えるように言ってある。
だから今日は久しぶりにナナリーとゆっくり遊んでいられるというわけだ。

「しかし、しばらく戦いが続いたせいで休みというのがあまり信じられんな……【ピピピ】　ん？　通信？　これは……C．C．？」

携帯にC．C．より連絡がかかってきた。今あいつにはアジトの整備を任せている。

……何かあったのか？　今日はライもアジトにいるはずだし、問題はないと思っていたんだが……

「どうしたC．C．。騎士団内でなにかあったのか？」

『ルルーシュか。今すぐアジトに来い。緊急事態だ！』

「アジトに？　今そこにはライもいるだろう？　ライでも解決できないことが？」

『むしろ逆だ。ライに関して問題が起こった』

「ライに？」

『ああ。私とライの間にできた子供についてだ』

……ん？
今、聞こえてはいけないような内容が電話から聞こえてきたような？

「……お前の冗談に付き合っている暇はない」
『だったら来てみろ。なかなか可愛くてな。ライによく似ている。瞳の色も同じだ』

……なんだ？　なぜこいつはそんなに嬉しそうに話している？
まさか本当に？
いや、ライにはカレンがいる。あいつが他の女に……ましてピザ女に手を出すとは思えん！

「……ライにかわれ。あいつから直接聞く」
『それがライのやつは私との間にできていたことを知らなかったようでな。ショックだったのか、先ほどアジトから出て行ってしまったんだよ』

「……わかった。すぐに行く。ただし、もし本当に子供がいなかったらお前のピザは今後自分で支払え」

『いいだろう。ただし本当に子供がいたらピザ代が二倍になることは覚悟しておけよ』

ナナリーのことが大切だが、これは俺の友の将来に関わる話。ひとまず今日はナナリーのことを咲世子に頼み、俺はアジトへと向かった。

―――騎士団アジト―――

ゼロの衣装に着替え、アジトに向かった。まだ朝方でほとんど団員はいない。もともと今日はつかの間の休息をいれるつもりだったしな。

するとラウンジにC．C．が子供を抱きかかえて座っているのが見えた。

……なっ！？　あ、あの子供は……

「ん？　ああ、来たかゼロ」

「ぜ、ゼロ……」

子供はC．C．の腕の中で震えていた。
その子供は……まさにライを小さくした姿。本当にライの生まれ変わりだった……

「……フフフフ、フハハハハ……フハハハハハハ！！」

もう俺には笑うことしかできなかった……俺の友が、まさかピザ女とそこまで進んでいたとは誰も想像できなかっただろう……

ーーールルーシュｓｉｄｅ　ｅｎｄーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーカレンｓｉｄｅーーー

「……眠い」

朝は嫌い。どうも体が起きてくれない。昔はいつもお母さんがよく起こしてくれたけど、今はお母さんがいないし……

「いっそライが起こしに来てくれればな……って何言ってるのよ私！／／／／／」

思わず少し想像してしまった。まだ半寝の私を起こしにきて、『起きないといたずらしちゃうよ』と言って……そして……／／／／／

「でもライって天然なところあるし、そんなことあるわけないか……【ピピピ】　着信？　C．C．？」

あの人から私に連絡なんて珍しい。というより初めてかもしれない。普段はゼロが私に連絡するし。

「もしもし」

『カレンか。今すぐアジトに来い。見せたいものがある』

「今から？　今日は休みじゃなかったの？」

せっかくの休日で親もいないし、ライを誘ってどこか行こうと思ったのに……それなのに呼び出しって……まあ、ライがいるなら別にいいか。

『なに、私とライの子供を見せてやろうと思ってな』

「……今日は4月1日ではありません。冗談はゼロ相手にしてください」

聞こえてはいけない内容が聞こえてしまった。

うんありえない。例えるなら日本人が皇族の騎士になるくらいありえない。いや、それ以上のことだ。ゼロの正体が実は知り合いだったくらいにありえない。

『だったら来てみろ。ライそっくりの可愛い子供が今アジトにいるぞ』

「……もし嘘だったら一発殴るから」

ありえない。ライは確かに女性にもて、争奪戦が激しい。しかし彼自身は他人の好意に対しては鈍感だ。その彼がそのように行為に移れるわけがない！　事実、私だってまだキスさえしてもらったことないし！

だけど本当だとしたら一大事だ。東京租界が一瞬で吹っ飛ぶ以上

に一大事だ。
頭はすっかり起きたし、私はすぐさま着替えてアジトへ向かった。

―――アジト―――

……ラウンジに子供がいた。思いっきりライに似た……というか、ライを小さくしただけみたいな子供が。小学生くらいかな？
その子供は疲れているのか寝ていた……C．C．の膝の上で。C．C．に抱かれた状態で。
なんというか、この姿は絵になる。遊びつかれて寝てしまった子供を優しく抱きかかえる女性……

「カレンか。どうだこの子供は？　随分ライに似ているだろう？」

似すぎです。むしろこれがライといわれても納得してしまうほどに。
身長は私の半分くらいだろうか？　服はライが寝巻きとして着ていたであろうシャツとズボンを着ていたが、ダボダボで手足がシャツとズボンの半分に届いてなくて、服の先は力なくぶら下がってい

る。
顔はものすごく幼くて、とてもかわいい。なんというか、ものすごく母性本能をくすぐられる……この状況でなければ！

「C．C．……その子供は何？」

「先ほどもいっただろう？　何度も言わせるな」

「……ライは？」

「今ここにはいない。起きてどこかに言ってしまったよ」

「……」

頭の中が真っ白になってしまった。私のこの状況はラクシャータさんがアジトに来るまで続いた。

―――カレンｓｉｄｅ　ｅｎｄ―――

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「……ん～……」

「起きたのか？」

「うん……C．C．、何をやってるの？」

昨日の疲れや、なれない体のせいで余計に疲労がたまったんだろう。服は結局見つからないし……そして僕はなぜかC．C．の膝の上で寝ていた。

「お前が寝てたからな。ぐっすり眠れるようにと思ったのだが……ちゃんと眠れたか？」

「うん……！　カレン達も来てたの？」

「ああ、幹部のほとんどが集まっているぞ」

ラウンジにほとんどの幹部が揃っていた。みんな複雑な顔をしているが……無理もない。僕だって信じたくない。できれば今すぐ現実から目を背けたい。起きたら体が縮んでいてしまったなんて……

しかし、なんでゼロやカレンが真っ白に燃え尽きているんだろう？

「なんというか……これは世間的にもまずいのではないか？」

藤堂さんが呟く。ですよね。起きたら体が縮んでしまっていた……なんて世間に伝わったら混乱しますよ本当。某探偵マンガもビックリですよ。

「なってしまった以上は仕方がないだろう」

C．C．が僕の頭を撫でながら答える……なんというか、気持ちいい。安心するというか。どうやら感覚まで幼くなっているようだ。どうしても頬がゆるんでしまう。

……なんだかカレンが恨めしそうな目で見ているのが気になるが。

「そういえば、ラクシャータは？」

こういうことに詳しそうな幹部の顔を捜すが、どこにも見つからない。

「多分そろそろ来るはずだ」

「お待たせ～」

「ラクシャータ！」

来た！　おそらくゼロ以上の奇跡を見せてくれるだろう幹部が……なぜかノリノリでやってきた。

「あ～らライ。随分可愛くなっちゃったじゃない。実験は成功ね☆」

「！？　ラクシャータ、何か知っているのか！？」

「「「しゃべった！？」」」

……ん？　なんでみんなして僕がしゃべったことに対して疑問を持っているんだ？
知能まで低下したと思っていたのだろうか？　一応なぜか知識はあるんですよ。筋肉とかは思いっきり子供だけど。まさに見た目は子供、頭脳は大人の状態です。

「昨日の夜、薬飲んだじゃない」

「薬？　……まさか、あなたが栄養ドリンクと言って渡したあれか？」

「正解♪」

こいつが元凶だったーーーーーー！！！　信じて待ってた相手が、犯人だった！！

「え！？　ちょ、ちょっと待ってくれ！　この子がライなのか！？」

「？　扇さん何を言ってるんですか？」

「……C．C．、貴方まさか……」

「か、カレン？」

そこには、赤い髪の鬼がいた。まさに今にも暴れだしそうな凶悪な鬼が……

「ちょ、ちょっと待ってカレン。一回みんなで話し合おう。なんだか話がかみ合っていない」

一度C．C．の膝から降りてカレンの下に向かうが……身長が足りない。カレンのズボンのすそを引っ張るくらいしかできなかった。おまけに服から手がでてないし……

「！　……うん。じゃあ私の膝の上においで♪」

「え？　……ぅわ！」

……軽々と持ち上げられた。なんというか複雑だ。カレンの様子が戻ったから別にいいけど。

ーーーーーー説明中ーーーーーー

「……つまり、昨日のラクシャータの薬のせいで体が小さくなったのは間違いないんだな？」

「ええ」

「で、C．C．は皆に僕は小さくなったのではなく、僕の子供と説明したと……」

「どうだったかな？」

……どうして皆信じたんだ？　年齢から考えてもおかしいだろうに……まあ、普通に考えて人が小さくなるなんてありえないけど。

「まあ、ひとまず皆理解したからいいとして……ラクシャータ、これはどうやったら治るんだ？」

「多分明日にでも治るはずよ」

「多分！？」

「あくまで試作品だからね。時間がたてば治るんだけど……それがいつになるかはわからないわ。長くは続かないだろうけど」

……いやいや、明日だとしても結構な衝撃なのに、いつ治るかわからないってどういうことだよ！？　そしてそんな試作品を僕にやるなよ！

「早く治す薬を作ってくれ！　この体ではナイトメアに乗るどころか、事務処理さえできない！」

「……仕事中毒者のセリフみたいだな」

「別にいいんじゃな～い？　ナイトメアに乗れなくても、カレンちゃんの膝に乗れるわけだし」

「全然良くない！」

なんなんだこのお気楽共は……今ブリタニア軍が攻めてきたら騎士団終わるんじゃないか？

「ライ……私の膝の上は嫌だった？」

「え？　いや、そういうことじゃなくて……むしろ嬉しいけど」

「じゃあ良いじゃない♪」

カレンが抱きしえる力を強めた……カレンさん、その……背中にやわらかいものが当たってるんですけど。

女性の良い香りと感触が僕を包んでいく……ますい。非常にまずい。カレン、言っとくけど体が小さいだけで精神は変わっていないんだよ！？

「まあいいわ。じゃあカレンちゃん、ひとまずライを貸して。少し調べるから」

「嫌ですよ！　このままでいいじゃないですか！」

「いや、全然よくな……ぶっ！」

反論しようとカレンの方を向いたが、その瞬間カレンが抱きしめてきたので……顔が埋もれてしまった。

息が……息ができない！　……何故だ、何故女性はこんなに良い

匂いがするんだ。なんだこの苦しい幸せは……

「ゼロ！　どうせしばらく大きな戦いもないですし構わないですよね！？」

『……まあ、君がそれだけの活躍をすれば「します！」　……わかった。いいだろう』

おい、ゼロ。当事者の意見無視ですか？　というかカレン、そろそろ息が……

「お持ち帰りしてもいいですか！？」

『……好きにしろ』

「ありがとうございます！」

本当に待って。僕の意思は完全に無視ですか？

朝起きたら体が戻って、目の前にはカレン……なんて状況になったらどうするんだ！？

あ、やっとカレンが腕をほどいた。

「ぷはっ……はあっ…ねえ、カレン……僕は」

「じゃあ行こっか♪」

「えっ！？　ちょっ……！？」

結局僕の意見は流され、カレンの家へと連れてかれた……

番外編　目が覚めたら……（後書き）

作「ライは女に毒薬を飲まされ、目が覚めたら……体が縮んでいてしまった！　ライが生きていることを奴らにバレたら、まわりの人間にも被害が及ぶ（薬の）。ライは薬の情報をつかむために、カレンの家に転がり込んだ」

ラ「／／／／／」

作「……一応翌朝にが戻ってたみたいだけど……何をされたの？」

ラ「……カレンに色んなもの着せられたりした。着替えが終わっても膝からおろしてくれないし……その後は一人でご飯も食べさせてくれないし、一人でお風呂に入らせてくれないし、一人で寝させてくれないし……」

作「つまり、ずっと一緒だったと……まあ、よかったんじゃない？」

ラ「よくない！　確かに起きたら体が戻っていたけど、服が小さすぎて破れてたし、カレンは下着姿だし、目の前に谷間があるし……／／／／／」

C「他人が見たら完全に誤解しそうな場面だな」

カ「ラクシャータにあの薬もらったし、また使お♪」

作「もらったの！？　……しかし、ラクシャータはなんであんな薬を作ったんだ？　ルルーシュ、君の指示ではないんでしょ？」

ル「……自分に使おうとしたそうだ」

作「……あの人って何歳だっけ？」

番外編　トラップ（前書き）

長いです。番外編なのに本編並に長いです。

時間軸は一期。リフレイン～ナリタ戦のあたりです。

もはやラクシャータがチートと化している……

先に言っておきますが、私はＡＢが大好きです。

番外編　トラップ

僕がカレンの推薦を受けて（半ば強制的ではあったが）、騎士団に入団してから一週間ほど。騎士団の仕事にも慣れてきて、幹部の人たちにも受け入れられるようになってきた。
今思えばブリタニア軍との戦闘、リフレインの押収などいろいろあったな……

今はゼロが幹部を招集して、作戦会議が行われている。僕も幹部の一員として会議に参加中だ。

『扇、報告を』

「ああ、そろそろ弾薬の備蓄が切れそうだ。次の作戦前に補充しておく必要がある」

騎士団はまだ『無頼』が僕とカレンの2機しかいない。ゆえに歩兵部隊の戦力をいつでも出せるようにしなければならないのだが……その弾薬がもうないのか。

「入団数も増えたことだし、新しい銃もいるんじゃないのか？」

杉山さんが提案する。
たしかにここ最近、ゼロの噂を聞きつけ騎士団に入団するものが増えてきた。まだ経験こそ少ないものの、そろそろ彼らにも実戦を経験してほしい時期だ。

『そうか……分かった。本日の作戦は、ギルド降下作戦とする』

「こ、降下作戦！？」

ゼロが作戦を伝えたが……なんだ！？　まさか、ブリタニアの武器庫に空から突撃するのか！？
騎士団には航空戦力なんてないと思っていたが……ゼロはそこまで用意していたのか！？　甘くみてたな。

……しかし、降下って……

「どうしたのライ？」

「ああ、いやちょっとね……さすがに空から降りていくのは……経験がなくてね」

カレンが心配そうに声をかけてくれたが……なんというか言いにくい。
カレンなんて普通に飛び降りそうだしな。僕のほうが恐れているなんて話にならないし。

『何を言っている。空から降下するわけではない。此処から地下に降下だ』

「ああなんだ地下か。それなら安心……って、地下！？」

今軽く流してしまいそうだったが、流してはいけないような内容がゼロから発せられた……地下にそんな施設があったのか？

『旧日本時代から避難用のシェルターだけでなく、東京の地下には日本政府が建造した巨大な武器製造所がある。ブリタニアにはその存在が知られていない。
私達がギルドと呼んでる、地下の奥深くだ。そこでは、仲間達が武器を作っている』

「……へー、そんなのあったんだ」

もはや何でもありになってきたな……

『まあ、どうせブリタニアが見つけても……辿り着けないだろうしな。無駄に金をかけただけあって頑丈に作られているし……』

「？　まあ、ブリタニアにばれないようにすればいいんだろ？」

『その通りだ。ギルドを押さえられたら武器支援がなくなり、我々に勝ち目はなくなる』

説明し終えるとゼロは通信を繋ぐ。おそらくそのギルドの代表者だろう。

『はいは～い』

『私だ、今夜そちらに向かう。トラップの解除を頼む。いいな、わかったな！？』

？　やけに真剣だなゼロ。なんでそんなに言う必要があるんだ？

『了解、今晩ね。待ってるわ～』

『よしっ。今回はこのメンバーで行くぞ。さいわいにも、現在ブリタニアはリフレインへの対応などに追われ、まともな掃討さえできていないからな』

「なあ、玉城はいいのか？」

「あれ？　そういえば……」

南さんに言われて初めて気付いたが、なぜか玉城がいない……どこに？

「あのバカはどうせまた単独行動してんだろ」

「玉城……本当にまともなことできないんだから」

「別にいいんじゃないのか？」

『いない者のことを言っても仕方がない。玉城は今日は不参加だ。

結局、いても邪魔なだけだろう』

……すばらしい信頼感だな。しかし、幹部の一人が勝手に動いて大丈夫なのか？

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――ゲットー―――

「……本当かよ」

見た目はまさしく地面そのもの。
しかしよく見ると地面が巨大な正方形状に縁取られていて、スライドさせると……見事に入口が現れた。

『さあ、さっさと行くぞ。ブリタニアに気付かれたらお終いだ』

そう言ってゼロが先頭で降りていく。続けて他のメンバーが続々と降りていく。そして最後に僕が降りていった。当然入口はもとに戻しておく。

ついでに、今回のメンバーは玉城を除いた幹部全員と団員三名が選出された。全員無事で帰ってこれればいいんだけど……

――――――

旧日本政府もよほど金をかけたと見える……ひょっとしたら、日本が負けるということも想定してこの施設を作ったのかもしれない。

「ここがギルドか。日本の地下にこんな場所があったなんて……」

「！　おい、あそこに誰かいるぞ！」

地下の広さに少し呆けていると、杉山さんが何かを見つけたようだ。恐る恐るライトの光をあててみると……

「ふっ……」

「……バカがいた」

「なんでここにいるの？」

なぜか行方不明中だった玉城（バカ）がいた。無駄にかっこつけている。独断行動でここにきてたのか……まさかブリタニア軍に見つかっていないだろうな？

「ライとか言ったか？　俺はまだ、お前のことを認めてねーんだよ」
「別に貴方に認めてもらいたいなんて思ってませんから」
「てめー……先輩に向かってそんな口答えをするとは……千回死なせたぅわっはぁぁぁぁぁ～！」

玉城の横からハンマーが振り子のように飛んできた。玉城は無惨にも壁にめり込み、追いうちをかけるようにさらにハンマーが直撃。その後、玉城の体からハンマーはグオンと元の位置に戻る様に離れた。
それに伴い、玉城自身も抑えが無くなったために、ぐったりと床に崩れ伏す。そんな玉城に、更にハンマーの衝撃で打ち壊された壁がガラガラと崩れて……彼に降り注いだ。生き埋めだな。

僕の横ではなぜかカレンが孤独の寂しさを感じさせるような歌を歌っている。

『総員、臨戦態勢！』
「ちょ、ちょっと！　どういうことだ！？」
「見ての通りよ」

「……カレン？」

こんな状況でも冷静さを失っていなかった彼女が僕に説明を始める。

「ギルドには、対ブリタニア用の即死トラップがいくつもしかけられているの。そして、今もそのトラップが発動しているのよ」

『またか……またあの女！』

「……え？　なに、どういうこと？」

『このトラップは解除し忘れたのではない！　ラクシャータやC．C．がわざとそのままにしておいたのだ！』

「僕達を殺す気か！？」

そのラクシャータやC．C．という人物は知らないが、ゼロの話から推測するに騎士団の人物なのだろう。

しかし、それならなぜ僕達にそんなことを……？　まさか、裏切ったのか！？　ブリタニアに寝返ったというのか！？

『ラクシャータはたとえ死人であろうと治せる。あいつらは、ただ私達がトラップにひっかかっている様子を眺めていたいだけだ！この前もそうだった……』

「ラクシャータって何者！？」

なんだよそれ……というか、前回もこれで死人でたのか！？もはやゼロよりも、ラクシャータの方が奇跡を起こしているんじゃないか！？

「つまり、私達は死なない……死ぬ痛みを味わうのよ」

「……ラクシャータやC．C．は人間なのか？」

「どうする？　引き返すか？」

『ここで退けばそれこそ笑いものだ……進撃だ！』

ゼロの決断は当然進撃。僕らは再び進み始めた。

「……ま、待て……よ」

「！？　玉城！？　生きてたのか！？」

「へっ、……あんなの、俺……には、蚊が……止まった、くらい……だぜ」

「いやいや！　そう言いながら体中から血がでているんだけど！？　右腕がおかしな方向に曲がっているんだけど！？」

『放っておけ。限界になれば自分で引き上げるだろう』

「いいのかよ……」

……さっそく不安になってきた。本当に、生きて帰れるのだろうか？

ーーー

「そういえば、どんなトラップがあるんだ？」

どうせろくな物がないのだろうが、一応聞いておく。あらかじめ知っておけばそれなりの対処ができるしね。

「そうね……一つでブリタニアの小隊を軽くつぶせるような物かな？」

「……」

カレンがなんとか明るく説明してくれたが……うん、危ない。そして全然明るくない。

「……！？　いけない！　何か来るわ！」

「えっ？」

カレンが何かを感じ取った。みんなが後方を注目する……通路を

ふさぐような巨大なものが落ちてきた……煙の中から現れたのは、巨大な鉄球だった。

そして鉄の玉は傾斜にそって転がりはじめる。

「走って！！」

カレンが叫ぶとみんなは一斉に走り出す。みんなは次々と目先にある角の入りこむ。僕もスピードをあげていくんだが……？

「ゼロ！？　君、先頭にいたんじゃなかったのか！？」

『……ッ！　こ、こんなの……俺の専門ではないんだ！』

そう、先頭を走っていたはずのゼロは横にいた。まずい！　これは間に合いそうにない！

逃げ切れないと判断した僕はゼロを捕まえ、そのまま穴の隙間に倒れこんだ。

「くっ！」

誰かが一瞬つまづきながらも、また走っていく姿が見えた。多分南さんだ。なんとか逃げてはいるが……

「うわぁぁぁぁぁ！！」

……鉄球に押し潰されたらしい。

「南さん……やられたか……」

『……すまない。助かったよ』

「ああ、別にいいよ。こんなところでリーダーがやられても困るしね」

『よし、犠牲は南だけだな。なら先に進むぞ！』

ゼロがサラッと言った。

「……え？　いいのか？」

「大丈夫よ。どうせラクシャータが治してくれるわ」

「……」

結構薄情なメンバーだった。

――――――

「……もち無理だぜ」

……玉城がやること事態間違いだと思うけど。というか、早くしないとまたトラップが起動しそうなんだよね……

……そして予想通り、いきなり僕たちが入ってきた入口が閉まってしまった。やはりトラップか！！

「何だっ！？」

「しまった！　忘れてた！　ここは閉じ込められるトラップだった！」

「そんな大事なこと忘れないでくださいよ！」

杉山さんに突っ込んでいると、突然照明がついた。

『くるぞっ！』

ゼロが叫ぶと、全員がしゃがむ。すると、壁に向かいあった点が同時に動いてきた。

「……なんだ！？」

ゼロが煙玉みたいなものを投げた……すると、何もなかったはずの空間に、うっすらと赤い直線が延びていた。

「赤外線レーザーよ。当たれば最高の切れ味で胴体を真っ二つにしてくれるわ」

「……これ、本当に死ぬよね？」

「第二射くるぞ！」

伏せることでなんとかレーザーをやりすごす。どうやら、誰も被害にあわずに、通り過ぎたみたいだ。

「第三射くるぞ！」

『第三射の形は！？』

「Xだ！！」

よりによって効果範囲が広いXだった。第三射が徐々に迫ってくる。みんなはそれぞれ避けている。僕も上にとんでかわした。

「まだあかないのか！？」

『少し待て！』

今度はゼロが扉と必死に格闘している。だがその時……

「うわぁぁぁぁぁぁぁッ！」

……後方誰かの叫び声がした。おそらく扇さんだろう。

「何だ！？」

「見ちゃダメ！」

カレンが僕を抱きしめることで僕の視界を閉ざす。

……あの、カレン。やわらかい感触が……僕の頭に押し付けられて……

『よしっ！　開いたぞ！』

開いたのを確認し、扉の外にみんなが一斉になだれ込む。

「助かった……」

「うっ、おぇぇ……」

皆が安堵している傍らで、杉山さんが嘔吐している。

「とんでもないもの見ちゃったみたいね」
「……やられたのは、扇さんか？　一体、何が……」
「伏せて避けようとしたみたいだけど……首を横に倒さないで、そのまま縦に落としたから……あの髪型のせいで……」
「……」
「だから髪を切れって言ったんだ」

あの髪型のせいで死ぬって……扇さん。アフロって大変ですね。しかし、まったく同情できない。むしろ愚かにさえ感じてしまう……髪の毛はどうなったんだろう？

「まあ、大丈夫よ。毛根以外はラクシャータがなんとかしてくれるわ」
「それならいいんだけど……毛根以外！？　なんで！？」
「それはそっちの方がおもしｒ……けっこう大変らしいわよ」

なんだろう。今、カレンの口から面白いと聞こえた気が……

『さあ、次に進むぞ』

――――――

「しまった！　忘れてた！　ここは天井が落ちてくるトラップだった！」

「だからそんな大事なこと忘れないでください！」

終わった。誰もがそう思った。後頭部を腕でガードしながら衝撃を待った……しかし、待てども衝撃が襲ってくる事も、その身が潰れる事も無かった。痛みもやってきはしない……なんで……！？

「「「団員Ａ！」」」

そう。名前もわからないが、屈強な肉体を誇る団員Ａが一人で落ちてきた天井を支えていた。

「……Ｈｕｒｒｙ　ｕｐ！　今なら間に合う……Ｏｈ……飛んでいって抱きしめてやれ……！」

なんで突然英語！？　というか、誰を抱きしめればいいんだ？……カレンでいいかな？　でもすぐそこにいるしやっぱり……

「ありがとう」

「じゃあな」

「達者でな」

……みんな軽すぎる！

でも僕も団員が作った一時を無駄にしない為に、脱出用の階段がある場所まで身を屈めながら進んでいった。

全員が脱出したころ……残された団員Ａは……

「はうっぐぅうう……！　Ｏｈ……ぐぅうう……！」

体全身にかかる重圧により鼻から血をツゥーっと伝わせながらも、僕たちの方へ何とか顔を向けた。

そして……彼は全員の安全を確認するとふっと笑顔を浮かべ……最後の最後に、左手の親指をぐっと立てて、先の武運を祈った。

『『『団員Ａ――――――

――――――

僕が続きを言おうとしたその時……地面が崩れる音がした。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「しまった！　忘れてた！　ここは……」

「「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」

杉山さんと二人の団員が声を上げながら落下していく……まさか、このときのために頭数をそろえたのか！？

いや、今はそんなことを考えている時間はない！

一番上では唯一地面に立っていて、幹部のなかでも屈強な吉田さんが、井上さんが取り出したロープを支えている。

そのロープに、幹部数人がぶら下がっている。そのため吉田さんの体力的余裕はない。

ちなみに上から見て、カレン・玉城・僕・ゼロがぶら下がっている。

「ここで戦力を失うわけにはいかない！　皆、早く登って！」

「ゼロ！　まずは君からだ！」

『……すまないライ。どうやら俺はここまでのようだ……』

「……え？　えええぇぇぇぇ！？」

『ライ、後は頼んだぞ！』

ゼロはその声とともに……落ちていった。どこまで体力がないんだ、あのチューリップは！　ルルーシュ以外にもこんなに体力のない人間がいたのか！？

というか、リーダーがこんなところで消えてしまっていいのか！？

「仕方がない！　僕から行くぞ！」

僕はふりこのように体をブンと揺らせた。上の玉城が痛みで悲鳴を上げるが気にせずそのまま動き……一瞬で上に跳躍した。その際に玉城の顔面を踏んで、その上にいるカレンの腰元に抱きつく形となった。

「痛いわっ！」

下で玉城が何か言っているが、気にしない。どうせ玉城（バカ）だし。

だが……ここからが問題だ。上にいるのはカレン……

「……」

……どこを掴めばいいんだろう？

「ライ、早く……登って！！」

「あ、ああ……ごめん」

これ以上重しになるのは良くない。だから思い切って一気にに登りはじめた。

「ああぁぁんっ！！」

……ものすごい色っぽい声が漏れました。カレンの胸元下辺りでそんな考えをしていた。
額付近に感じる柔らかな感触と女性の良い匂いに内心どぎまぎしながらも上に登る……カレンの顔がこっちを向いていた。

「な、なんでこっちを見てるの！？」

「し、仕方がないでしょ！　と、とっとと登ってよ／／／／」

カレンは顔をほんのり赤くしながらさっと僕の顔から目を逸らした。このままだと何か変な気分になりそうなのでさっさと上へ登っていった。

井上さんがジト目で見ているのが気になるけど……

「よっと……」

ようやく床だった場所に着くと一息ついた。全身をようやく楽に出来ると安心感がかなり生まれる。
これで皆を助けられる。そう思ったが、次の瞬間……

「きゃぁぁぁ！　そんなところ持てるわけないでしょーーー！」

「ぎゃぁぁぁ！　ば、バカぁぁぁぁぁぁぁ！！」

……玉城の無残な悲鳴が聞こえた。

玉城を除いて全員がなんとか登ってきたが……

「えーっと……玉城は？」

「意味のない犠牲になったわ」

「そうか。なら仕方がない」

いくら玉城でも、あそこから登ってくるのは不可能だろう。戦場からミイラのように何度でも復活する不死の男でも、あそこからは……「……ま……て……」……

「……玉城？」

近くの地面にロープを引っ掛けて、登ってくる玉城の姿があった。その顔には誰かに蹴られたような足跡が二つある……僕とカレンのだろう。

「お、俺は……死な……ねぇんだよ」

「もう死んでもいいはずだけど？」

「……まあ、数は多いほうがいいわ。行きましょう」

「そうね。早くラクシャータのもとに行かないと」

「ついに、五人になっちゃったね」

……リーダーのゼロもやられ、残りはわずか幹部五人。この状態で最後まで行ければいいんだけど……

「へっ……まさ……か、新入りの……お前なんかが、生き残る……とはな」

「……貴方がまだ生き残ってるほうが不思議ですが？」

「というか玉城。もうやめとけ」

「何、言ってやがる……次は、テメーの……番だぜ……」

吉田さんの制止も聞かず、玉城は歩き出す……もう足もふらついているし、死にそうだけどね……

――――――

――――――

「ライ、カレン。出口はこっちよ。着いて来て」

泳ぎの得意な井上さんが脱出口を探し当てた。井上さんを先頭に、僕とカレンも泳いでいく。

……いくつか水路が別れていて、一人だったら迷ってしまいそうな広さだ。見つけてくれた井上さんに感謝しないとな。

――――――

「大丈夫かカレン？」

「ええ、ありがとう」

後から辿り着いたカレンに手を貸す。さすがに今までの道のり、そしてこの潜水による疲れが見えた。僕も肩で息をしている状況だが。

「二人とも、こっちよ！」

「！　井上さん……」

「行きましょう」

先行していた井上さんがどうやら進路を確保していてくれたようだ。僕達も息を整えて再び歩き出す。

……前を見据えると、なぜか川からダンボールが流れてきた。中には犬のヌイグルミのようなものが見える。

「……えっと、何あれ？」

「あれは！　まさか……「アーーーッ！　子犬が流されてるーーー！」　……！」

「えっ！？」

「井上さんダメです！」

しかし、カレンの制止を聞きながらも井上さんは立ち止まることなく川へと飛び込んでいった。

そしてしっかりダンボールを確保して、その時にやっとその正体に気付いた。

「そんな！　ヌイグルミだったーーー！！」

井上さんはそのまま川を流れて……下流の深い滝壺へ落ちていった。

「……」

「そんな……井上さんまでトラップの犠牲に……！」

「え！？　あれも対ブリタニア用の即死トラップなの！？　……と

いうか、一目で気付こうよ」

「可愛いものに対する誤認が、井上さんの弱点なのよ……」

「……意外な一面があったんだね」

しかし、タイミングが良すぎないか？　まるで僕らが来たのを確認したかのようにトラップが……まあ、今のでもうこのトラップにはひっかからないし……！？

なんだ！？　また何かダンボールが……しかも二つ！？

一つ、ナナリーの写真集。

一つ、神楽耶様など数多くの小さい女の子のプロマイド。

……なんだこのトラップは？　というか、なんでナナリーの写真が？　こんなのばれたらルルーシュに殺されるんじゃないか？

「……えっと……これは、僕に対するトラップなのか？」

「……私は今までこんなの見たことないけど」

「じゃあ、これは……「『あーーーーーッ』」……！？」

突然後方から声が聞こえる。振り向くと……死んだはずのゼロと南さんが全速力で駆け抜けていった。

『ナナリーーーーー！！！』

「こんなところにお宝がーーーーー！！！」

「「……」」

「『とおっ！！』」

「いや、待て二人とも！！」

二人はためらうことなく川へと飛び込んだ……なんでだよ！？

せっかくメンバーが揃ったと思ったのに！！

『許せライ！　男なら……たとえ侮辱されようとも、愚かだと軽蔑されようとも……やり遂げなければならないことがあるんだ！』

「こんな場面でそんな格好いいことを叫ぶな！」

「ライ！　お前にもわかるときが来る！　男なら、やらずに後悔するより……やって後悔しろ！」

「幼女趣味のあんたの気持ちは一生わかりません！」

二人は本来なら格好いいはずのセリフを叫びながら……しっかり中身を抱きしめながら川底へと落下していった……なんだろう。仲間が死んだはずなのに、まったく悲しくない。

……しかしなんでゼロがナナリーを知っているんだ？　ゼロにもそっちの気があるのだろうか？

ーーー

ーーー

「……急に何？」

「君のお母さんが傷つけられたということは知っている。だけど、君はそれを知る前から騎士団に入っていたし、戦い続けていた。
正直、君がそこまで戦うのには他にも何か理由があるんじゃないのかって思ってね……」

「……そうね。ライになら話してもいいかな……」

一瞬彼女はためらったような顔を見せたが、それでも再び僕を見つめて話し始めた。

「私ね……お兄ちゃんがいたの。ゼロが現れる前から、ずっと私達のために戦っていたお兄ちゃんが。
本当はね、扇さんのレジスタンスグループもお兄ちゃんがリーダーだったの」

「そうだったのか……」

「でも、そのお兄ちゃんもブリタニアとの戦いの中で生死不明になった……本当なら、今も一緒に暮らせていたはずなのに……」

「……」

「私はそんなお兄ちゃんの意志を継ぐために戦っている……だって、許せないじゃない。国を奪って、お兄ちゃんまで奪って……そんな理不尽、許せないじゃない……」

半端な理由なわけがないとわかっていた。本来戦う人間ではない彼女が――それどころか裕福な生活だって送れるはずの彼女が戦場にでるのには、それなりの理由があるとわかっていた。

……それでも、彼女の覚悟はこの体には重すぎる……

「……強いんだな、カレンは」

「え？」

「僕の記憶がそんなものだったら、現実から逃げ出そうとしたかもしれない……けど、カレンは戦うんだな」

「……ええ」

「それなら、君は前だけを向いていればいい。君はとことん進めばいい。君の背中は……僕が守る」

「ライ？」

「今の僕は記憶を取り戻すことしか目標がない。守るものも、貫きたい思いもない……それなら、君の道を守りたい……どうかな？」

「……バカね。まだ入団して一週間くらいのくせに」

カレンは顔にわずかながら笑みを浮かべて立ち上がった。

「さあ、行くわよ……私も、貴方を守るから……」

「！　……ああ、行こう」

『記憶を取り戻す』――それだけが僕の目的だった。だけど今、新たな目的ができた。

『カレンを守る』――彼女の体も、心も……僕が……

――――――

「ここが……ギルド！？」

ギルド最深部。そこはまさに、日本最大級と言ってもいいほどの規模を誇った施設だった。さすが、政府が直接作らせただけのことはある！

僕とカレンが降りていくと、おそらく騎士団の者であろう人物が現れる。

「いらっしゃ～い。ギルドへようこそ♪」

「今日は二人か……」

「……久しぶりですね。ラクシャータさん、C．C．」

なるほど、どうやらこの二人がゼロたちが言っていた幹部らしい。

「そいつが新しく入った男か……よくあれだけのトラップをクリアしたな」

「……もう二度と体験したくはないけどね」

「今日は不足した弾薬の備蓄、それと銃の補充をお願いしたいんですが……」

「ええ。まあそれよりも……他のメンバーを回収してからね。すでに団員が救助に向かっているけど……」

「まったく。なさけない奴らだ……」

「そんなこと言うなら、最初からトラップなんて仕掛けないでくれ」

どうやら本当に治せるらしい。玉城などは本当に死ぬ直前なので早く救助しなければならないと思っていたが……この様子なら大丈夫そうだな。

——————————————

C．C．から弾薬や銃の補充を受け取る。現在ラクシャータは幹部の治療中だ。

「……他の皆はどれくらいかかる？」

「多く見積もって2時間もあれば復活する。それまでは二人とも休んでいろ」

2時間……驚異的な早さだな。全員の回収はすんだけれど、大抵のものが重症だった。そんな短時間で治るものではないんだが……

『ギャーーーーーーーー』　……？　ラクシャータが治療している場所から誰かの断末魔が聞こえる。

『何よ……大人の癖に情けないわね～』

『待て、待てラクシャータ！　何だその装備……あーーーーーーーッ！！！』

ギリ、ゴリゴリ、ブチッ。ガゴドド、ドリドリ、ドドドドド。

……治療とはまったく関係のないような音が聞こえてきた。

「……えーっと、あれは治療しているんだよね？」

「まあそうだな……トラウマになりたくないなら、見ないほうがいいぞ」

……今、もう一つある目標ができました。

『絶対ケガをしない！　しても、ラクシャータには診せない！！』

番外編　トラップ（後書き）

ル「今回、なんだかんだ言って、名前もわからない団員Ａが一番男だったな」

Ｃ「扇が一番惨めだったがな……」

作「本来なら第二のトラップのとき、カレンを引っ掛からせようとしたんですよ。なぜか服だけがはじけ飛んで裸になってしまうという、恐ろしいトラップを……そして、それを見て欲情するライ……」

ラ「しないよ！　なんてこと考えてんの！」

作「ほう……本当にそういえるのかな？　ならこれは？　下着までもが吹き飛び、全裸と化したカレンのしゃじん！？」

カ「なんてもの持ってるのよ！？／／／／／」

作「……ガッ……ハッ……」

ラ「大丈夫か？」

作「……しかし、そこでカレンを脱落させるわけにもいかないので扇の髪に犠牲になってもらいました……けっこうその描写考えてたんですけどね。

『カレンは、胸を隠すように腕を胸の前でクロスさせ、地面に座り込んだ。だが、逆に胸をより強調するような形になってしまう。大きく形の良いバランスのとれた丸みの胸の先端に、桜色づいてる部分があるのまではっきりと見てとれるほどに全裸だった。ライは思わず食い入るように見入ってしまう。そのままライはカレンを押し倒し……』

……どうしたんですかライさん、カレンさん。いきなり立ち上がって……ってギャーーーーー！！！」

ラ「えー、作者が犠牲になりましたが、皆さんの感想でおそらく復活すると思います。みなさん、これからもよろしくお願いします」

作「……私を倒しても、第二・第三のユーザーが、この話を……」

ラ「どこの悪役だ君は？」

カ「まだ足りないのかしら？」

作「調子に乗ってすみませんでしたー！！　ですから、ですから輻射波動だけはーーー！！」

チーンッ☆

番外編ＩＦ　二人だけの戦場（前書き）

……一期、ブラックリベリオンです。シリアスです。

ライが騎士団ではなく、スザクを経由して軍人になりました。でもライカレです。

本編ではスザクＶＳカレンでしたが、この話はライＶＳカレンです。

……実際のところ、ライとカレンって実力はどっちが上なんですかね？　総合力ならライが勝つんでしょうけど、ナイトメアだけに限ればどっちが勝ってもおかしくないと思うんですが……

番外編ＩＦ　二人だけの戦場

いっそのこと、僕達は出会わなければよかったのだろうか。

少なくとも僕たちが出会っていなければ、このように苦しむことはなかったのに。こうして戦場で会っても、心が痛むことはなかったのに。

ただこうしてナイトメア越しに相反するだけで、胸が締め付けられる。

だけど、それでもその心を持つことができたのは、人間らしい心を取り戻すことができたのはみんなと……カレンと出会えたからだった。

記憶を失い、途中で力尽きた僕をアッシュフォード学園の皆は受け入れてくれた。

名前しか覚えていない、不信感しか感じられない僕を。

皆と会ったのはその時だ。ミレイさんの紹介を受けて、生徒会の皆と会うことができた。カレンとも、その時に初めて顔を合わせた。

最初は彼女のことが良くわからなかった。普段はおとなしく、貴族の令嬢としてふるまっていたが、時には影で活発な動きを見せたり、日本人をかばったり……と。

だけど、僕のお世話係主任となって彼女と一緒に暮らす時間が増えるにつれ、彼女のことがだんだんとわかってきた。普段のおとなしい彼女が演技であることも。

本当の彼女は優しく、そして誰よりも強い子なんだということも。

次第に僕は彼女に惹かれていった。そして、彼女を守りたいと思うようになっていった。そこで、僕はカレンに告白した。「君のことが好きだ」と、ただそれだけ。他に何を言えば良いのかわからなかった。

正直言って、断られるだろうと思っていた。まだ僕自身でさえ、僕のことを理解できてなく、彼女はなおさら僕のことを知らないのだから。

だけど、彼女はうなずいてくれた。あの時は本当に嬉しかった。これからは一緒にいられると、そう思えたから。

そんな僕たち二人の関係がわからなくなってきたのは……チョウフの一戦からだろうか。

スザクの素顔が騎士団との戦闘中にメディアによって全国に流された。それによって、生徒会のメンバー……特にカレンから質問されたんだ。「貴方も、ナイトメアのパイロットなの？」と。

軍に入る時にも彼女には反対された。だけど技術部で戦場にも出ないから大丈夫と嘘をついてしまった。

そしてその嘘が……彼女にばれてしまった。

スザクも戦場に出ていると明らかになった以上、嘘を隠し続けることは不可能と判断し、僕は正直に答えた。カレンはただ「そうなんだ……」と言って立ち去っていった。

あの時は、僕が黙っていつ死んでしまうかわからない戦場にいたことを怒っているのかと思っていた……だけど、それは違っていた。

その後、式根島の戦いで僕は見てしまった……黒の騎士団の主力ナイトメアである紅蓮弐式から、カレンが出てくるのを。

理解はできた。日本人を気遣い、時にブリタニアに対して憤る彼女だ。カレンの性格もわかってはいたし、そのことに対しては驚き

はしたが納得できた。

だけど、その事実をすぐに受け入れることは……僕にはできなかった。

今まで何度も騎士団と戦い、その中で紅蓮弐式と戦ったこともあった。僕は守ろうとしていたカレンと、戦っていたということに他ならないのだから……彼女を手にかけようとしていたんだから……

どうしてもっと早いうちに気がつかなかったのだろう？　彼女の演技が上手かったからなのか。それとも、僕が現実から目を逸らしたかったからなのか。

……多分、後者だろう。僕は知らぬうちに恐れていたんだ。カレンを失うことを、カレンと戦場で戦うことを。

それほどまでに、僕はカレンに対して骨抜きになっていたんだ。

だからこそ、ユーフェミア皇女殿下の行政特区日本宣言の時は嬉しかった。これが本当に成功すれば、またカレンと一緒にいられる、戦うこともない――そう思えたから。

なのに、その純粋な思いはあっけなく崩れ去った。

ユーフェミア皇女殿下が乱心。突如日本人の虐殺を命じ、行政特

区日本の式場はあっという間に地獄に変わった。重なるはずだった僕達の道は再び閉ざされた。

そして今、僕は戦場と化した東京租界にいる。みんなと出合ったこの場所で、クラブに乗って紅蓮と……カレンと対峙していた。

「……カレンだね」

「……ええ、ライ」

聞くまでもないことだ。騎士団の最高戦力とも言えるこの機体に、彼女以外が乗れるわけないというのに。

それでも聞いてしまう自分に呆れてしまう。そんなことに期待しても意味ないとわかっているのに。わかりきっていることに希望をよせてしまうほど、僕は弱くなってしまったのだろうか。

それともこれが、僕の彼女に対する感情の表れなのだろうか？

「降伏してくれカレン。騎士団の戦力では、ブリタニアには勝てない！」

「嫌よ。貴方、戦況を理解しているの？
すでに騎士団は多くの拠点を占領して、残るは政庁のみ。貴方こそ、今のうちに降伏して！」

「それは、できない相談だ……」

確かに今でこそ騎士団が有利だ。しかしそれはゼロの奇襲が成功し、ブリタニア軍が総崩れしたからだ。
もし今コーネリア皇女殿下が政庁で篭城し、軍の再編成が終われば、その差はすぐになくなる。
おまけにこちらにはシュナイゼル殿下が率いる援軍も来る。時間がたてばたつほど、騎士団は不利になるわけだ。

……もし今ここで僕が騎士団に加われば、騎士団の勝利も不可能ではなくなるだろう。
第七世代ナイトメアであり、フロートユニットもついているクラブがもし寝返ったならば、ブリタニアにとって大きな痛手だ。これを止められるのはランスロット――スザクくらいだろう。

だけど、僕はスザクを見捨てることはできない。

今の彼はゼロへの憎しみに囚われ、狂っている。かつての平和を望んでいた彼ではない。ただゼロさえ殺せばいいと思っている。
……主君を貶められ、愛する人を目の前でゼロに射殺されたんだ。

悲劇は悲劇を呼ぶと言うが、ここまで負の連鎖は続くものなのだろうか？　本当に、神はどこまでも残酷だ。
スザクとブリタニア、カレンと日本。この二つを大きく引き離すのだから。僕に、どちらか片方しか選ばせてくれないのだから。守らせてくれないのだから。

「カレン、場違いだとわかっているけれど……君に一つ聞きたい」
「……何？」
「僕は、本当に君の事を好きだった……愛していた！」
「！」
「だからこそ、そんな君を守りたくて軍に入った……君はどう思っていた？　本当に、僕のことを想っていてくれたのか……それとも、騎士団に勧誘するためだけに、僕に近づいたのか？」

本当のことを言えば、答えはもうわかりきっている。優しい彼女が僕を利用していたわけがない、と。

それでも、彼女の口から聞いておきたかった……本当に、弱くなっているな僕は。

「……私も、本当に好きだった。今でも、その気持ちは変わらない」

……嬉しかった。そして同時に悲しかった。想いが本当だとわかって嬉しいはずなのに……いや、だからこそこの現実が悲しい。

あの時ふられても良かった。恋人でなくても、僕はカレンが傍にいてくれれば……いや、彼女が幸せならばそれだけで良かった。僕の幸せは、それだけで十分だったんだ。十分だったのに……

「カレン、君の相手は僕がする。誰にも、君は渡さない！」

「そう……それなら、最期まで相手になってもらうわ！」

カレンの相手を自分がする必要なんてない。むしろ、彼女と戦いたくなどない。だけど、彼女を他の軍人に殺させたくなどない。

戦いたくないというのに、自分が彼女と戦うというのはどういう

矛盾だろうか？　僕でも不思議だ。

多分、これが独占欲というものなのだろう。僕は誰にもカレンを渡したくないんだ。誰にもカレンの相手をさせたくないんだ。だから、僕は一人で戦う。今このときも、そしてこれからも……

「さようなら、カレン」
「さようなら、ライ」

僕の一番大切で、初恋の人……

番外編ＩＦ　二人だけの戦場（後書き）

作「敵となり、戦いあいながらも想いを止められない……何、このロミジュリ展開？」

ル「まだ『分かり合えぬ者達』の方がましだな」

作「カレンを他の軍人に殺させるのだけは許せない……ゆえに戦いたくもないのに戦場に出るライ。自分で書いてて悲しくなってくるんですけど……」

番外編ＩＦ　愛と憎悪の狭間（前書き）

時間軸：一期のチョウフ戦後。騎士就任式のお話。

ユーフェミアがライ・スザクの二人を騎士に任命します。これにより、当然のことながらカレンにも伝わるわけで……

番外編ＩＦ　愛と憎悪の狭間

―――カレンｓｉｄｅ―――

神聖ブリタニア帝国第三皇女、ユーフェミア・リ・ブリタニア。彼女が昨日、突然自分の選任騎士となる者達をメディアに発表した。今日はその騎士達の就任式。

本来ならこんなもの見る必要もない。副総督とはいえ、自分では何もできない人形の皇女。そんな者の騎士なんて、見たところで何の意味もない……そう思っていた。

だけどその選任騎士の名を聞いた時、私の思考は完全に停止した。

どうして……？　どうして貴方がそこに映っているの？

言ったのに。『君を守りたい』って。『君を守るために軍に入る』って。

ならどうして、貴方がユーフェミアの就任式に出ているの？　どいうして貴方があのお人形の皇女の前で膝を折っているの？　私を守ってくれるんじゃなかったの！？

『ライ。汝ここに騎士の誓約を立て、ブリタニアの騎士として戦うことを願うか』

『Ｙｅｓ，Ｙｏｕｒ　Ｈｉｇｈｎｅｓｓ』

『汝、我欲を捨て大いなる正義のために、剣となり盾となることを望むか』

『Ｙｅｓ，Ｙｏｕｒ　Ｈｉｇｈｎｅｓｓ』

茫然自失。

二の句が告げなかった自分を表すには、この表現がまさに相応しいだろう。

そんな現状についていけない私などお構い無しに、時間は進んでいく。

『私ユーフェミア・リ・ブリタニアは、汝ライを騎士として認めます』

その宣言とともに剣が返され、ライはそれを受け取り鞘へと納める。その音を合図に、ユーフェミアが右手を払い、会場の貴族たちに向かって顔を見せるように促す。

その顔は……間違えようもなく、私が愛した……愛し合った人だった。

その人は堂々とした笑顔をしていた。まるで、本当に光栄であるかのように。

「まさか、あのスザク君やライがユーフィミア皇女殿下の騎士になるなんてねー」

「同じ生徒会の俺たちも鼻が高いよな」

「リヴァルは全然関係ないじゃない」

「そりゃそうだけどさ、あはは」

「……」

うるさい。

どうしてこうも周りが騒がしいんだろう。本当はこんな映像見たくなかった。ライが私以外の人を守るなんて信じたくなかった。

ライが本当はあの青兜のパイロットだというだけでもショックだ

った。今まで敵として戦っていたという事実が。
それなのに、追い討ちをかけるようにユーフェミアの選任騎士になるという報道。ミレイさんが『みんなで二人の勇姿を見届けましょう』と言い、無理やり連れて来られて……それでこんなに傷ついて……

なんで？　どうしてこうなったの？
ギリ、と歯を食いしばる。そうでなければ、場所も考えずに今にも叫びだしてしまいそうだった。

「どうしたの？　もっと喜びなさいよ、表情固いわよ。せっかくの恋人の晴れ舞台だって言うのに……」

「えっ、ああ、もちろん嬉しいですよ」

……この人はなにもわかっていない。だからこそ、平気でこんなことが言える。
本当なら、恋人の出世を祝うべきなのだろう。それが普通だということだってわかってる。
でも、私は彼の敵なんだ。私たちが倒そうとしている敵に忠誠を尽くしているのが彼なんだ。

画面には今だ就任式の映像が映っている。そこには、ライとユーフェミアが並んで微笑んでいる姿があった。

ライの横で、ライと並んでいられる場所。
ずっとそこは私だけの場所だった。これからもそのはずだった。
私だけが許された場所だった。

なのに、今はそこにお人形の皇女が立っている。

「……どきなさいよ」

私は他人に聞かれないような小さな声で呟いた。どうして貴方はあんな女の傍で笑っているの？

様々な感情が入り乱れていたはずの胸に、ひとつの真実だけが残り、頭をクリアにさせる。
私は画面を睨みつける……いや、睨みつけるだなんて、生ぬるい。視線だけで殺せれば、どれだけ嬉しいだろう。今すぐあの女を殺せるなら、どれだけ嬉しいだろう。

「貴方は、その場所を選ぶのね……その女を、ブリタニアを……」

「？　カレン、どうしたの？」

みんなが私を引き止めるけれど、私は何も答えずに、生徒会室の扉を開けて外に出て行ってしまった。

「ライ。貴方が全部私のものにならないなら……私、何もいらない」

貴方がその女を、ブリタニアを選ぶなら……私は何も言わない。
貴方が私のことを選ばないなら、私のものにならないなら……私は貴方は必要ない。

さようなら、ライ。そしてこんにちはブリタニアの騎士さん。次は戦場で会いましょう。

私が貴方を私の色に……紅蓮一色に染めてあげる。
だから二人で、戦場に赤い華を咲かせましょう。

―――カレンside end―――

――――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――

「大丈夫だって」

軍に入る時、彼女には反対された。それでも『スザクと同じ技術部だから戦場には出ない』と言って、ようやく説得した。

……その嘘が今ばれてしまったけれども、多分彼女なら受け入れてくれるだろう。

僕は政庁から出て、カレンへと電話した。

『……ライ？』

「ああ僕だよカレン。今学校に向かっているんだけど、話したいことがあるんだ。今どこにいる？」

『ごめん。今日は少し用事があって……もう帰ってるの』

「ああそっか……じゃあ、次の機会にするよ」

本当なら今すぐにでもカレンと面と向かって話したいところだけど……用事があるなら仕方がない。

元々これは、僕自身は招いてしまったことだし。

『ねえライ……ユーフェミア皇女殿下の騎士になったのって……本当なの？』

「！？　……ああ、本当だよ。そのことで君に話したいことがあったんだけど」

『いいわ。それだけ聞きたかったから……おめでとうライ。頑張って貴方の主を守ってね』

「あ、ああ。でも僕は……『じゃあね』　！　カレン！？』

切られてしまった……なんだろう。カレンの様子がおかしい。声もなんだかいつもよりトーンが低かったし。

……やっぱり、僕が黙っていたことに怒っているのだろうか？

早く謝っておいたほうがいいな。

……せめて伝えておきたかったんだけどな。

僕が本当に守りたいのは……カレンだけだって。

番外編ＩＦ　愛と憎悪の狭間（後書き）

作「……カレンが覚醒した」

ル「この後式根島・神根島とどうなるんだか……」

作「それより心配なのはＢ．Ｒですけどね。今の彼女なら本当に本気で襲い掛かりそうですし」

Ｃ「せめて最後の言葉が伝わっていれば、変わっていたかもな……」

番外編ＩＦ　愛に狂う者（前書き）

またしてもカレンが……時間軸は神根島です。

若干ではありますが、Ｒ１５要素が含まれていると思うので注意してください。

番外編ＩＦ　愛に狂う者

式根島で謎の砲撃を受け、神根島へと移動してしまっていたライ。通信機器も壊れ、味方との連絡も取れないと理解した彼は、この島で生き残るためにまず水飲み場を確保するために動き出す。

だが、彼が向かった先に彼以外の人物が待っていた。黒の騎士団の団員が着ている団服に身を包んだ赤い騎士が……

「か……カレン？」

「？　あ、ライ！　よかった！　ライもここにいたんだ！」

ライはその場から動けなかった。

好きな女性が黒の騎士団に……敵組織に所属していることが判明したからではない。

すでに彼女が騎士団に所属しているということは式根島でわかっていた。敵の主力ナイトメア『紅蓮弐式』から彼女が飛び出すのを見たから……『カレン・シュタットフェルト』と名乗ったのを聞いたから。

その姿は間違いなく彼が愛した姿だった。ライはカレンと共にすごした時間が長いこともある。見間違えるはずがない。
髪が学園時のストレートから変わったくらいで、後は特に変わりない。変装さえしていない。これで見間違えるほうがおかしい。

ライが立ち止まった理由———カレンのすぐ傍にできている赤い水溜りを、そしてそこに倒れている女性を見たからだった。

「……カレン。そこに倒れているのは誰だ？」

「誰って……ブリタニアの皇女様じゃない。見ればわかるでしょ？それとも忘れちゃったの？」

「……ユーフェミア様？」

そう。倒れていたのはライとスザクの主、ユーフェミア・リ・ブリタニアだった。
先日、彼らを自分の選任騎士に任命したばかり。その彼女の体からは血があふれ出て、赤い水溜りを形成していた。

「本当に嫌な女よね。自分一人では何もできないくせに、ライを騎

士に任命したりするなんて。
どうしてブリタニアはそこまでして他人から大切なものを奪うのかしら？　この女、私がライのことを聞いたら何て言ったと思う？
『ライは私の騎士です！』　だって！
本当に何もわかってないわよね。ライは私のことを守ってくれるって言ったのに……」

「なぜだ……なぜ……なぜユーフェミア様を！！」
「？　なんで怒るの？　私はただ邪魔者を排除しただけじゃない。これでライをブリタニアに縛り付けるものはいなくなったんだよ？」
「……邪魔者？　縛り付ける？」
「だってそうじゃない。この女は一方的にライを選任騎士に任命して、ライを軍から離れないようにして、軍に縛り付けて……私からライを奪ったじゃない！！」

カレンはユーフェミアへの怒りをひたすらに叫び続けた。今まで溜まった鬱憤を晴らすように。

「でもさ、ライ。もういいんだよ？　軍なんか辞めて。それよりもさ、一緒に騎士団に入ってよ。
私、いつでもライと一緒にいたいの。あなたの傍に立っていたいの」

「……嫌だよ。僕には、軍人としてやらなければならないことがある」

「なんで？　私じゃ駄目なの？　……スザクがいるから？　それとも以前会った女の人？　それともあの眼鏡の科学者？」

カレンはライが親しい人物を思い出しては名前を挙げていく。彼らとは学園での呼び出しの際に顔を合わせていた。

「それとも……みんな消せば一緒にいてくれる？」

「違う！　そんなことじゃない！　僕はブリタニアの中から変えるために軍に入ったんだ！　軍人として、君を守るためにも！　だからこそ……僕は君を見逃すことはできない……！」

そう言ってライはカレンに向けて走り出す。カレンはそれが敵の攻撃だと感じ、後ろに跳び彼から距離をとった。

ライはユーフェミアの生死を確認する……血が大量に流れているが、かすかに息をしている。まだ、死んではいなかった。

「ユーフェミア様！　しっかりしてください！　意識をしっかり保

ってください！」

ここですぐに軍の助けが来れば、彼女は助かるかもしれない。だからこそ、ライは必死にユーフェミアに呼びかけた。

……だが、その行動がカレンを更にいらだたせた。

「……なんで、なんでそんなヤツの事なんてかばうの？　ねえ、どうしてライ？　その女のなにが良いって言うのよ！？」

「この方は僕達の主だ。僕はこの方を守らなければならない……」

「……嘘。嘘でしょ？　どうして嘘つくの？　ライは私を守ってくれるんでしょ？」

「そうだよ。そのためにも軍人として「それで何が変わった！？」

……！？」

「あなたが軍に入って何が変わった！？　何も変わらないじゃない！

ブリタニアは今も日本人を弾圧し、苦しめている！　でも私達は

違う！　今も、ブリタニアと戦ってここまで勢力を広げた！」

「……僕は……」

「ライはアイツらに騙されてるんだよ！　あなたも所詮駒として扱われているのよ！」

カレンの反論に対し、ライは咄嗟に言葉が出てこなかった。思考がどんどん真っ白になっていく。

彼女はそんな彼に少しずつ近づきながら、次々と言葉を投げかける。

「大丈夫だよ。わかってる、わかってるから全部アイツが……ブリタニアが悪いんだねライ」

「カレン……僕は……」

「大丈夫。邪魔者は全部私が片付けるから。お互いに支え合っていこうねライ」

ライは抱きついてきたカレンを……拒絶できなかった。

愛に狂った少女を受けとめてしまった。

騎士の誇りを捨てて、狂王は狂愛を選んだ。

番外編ＩＦ　愛に狂う者（後書き）

作「……原作崩壊」

ル「……このとき、俺やスザクは何をしていたんだ？」

作「ユーフェミア・カレン・ライとルルーシュ・スザクに分かれました。ルルーシュがなんだかんだうまいこと言ってスザクを説得し、一時休戦……といった形に」

ラ「……もう、これは続けられる話ではないな……」

番外編　理性ＶＳ本能（前書き）

お久しぶりです！！　復活しました！！

時期的には１期の夏です。

番外編　理性ＶＳ本能

「今晩、私と一緒に寝て！」

「……え？」

カレンが顔を赤らめて僕に言ってきた……落ち着け、落ち着くんだライ。

この程度のことで動揺するなんて情けない。戦闘隊長の名が泣くぞ？　冷静さを失うな。戦場では冷静さを失った者から死んでいくんだ。

きっとあれだ。作者が２ヶ月ぶりに書いているでおかしくなっているんだ。実際時系列がおかしいし。

そうだ。そうに違いない。

落ち着いて現状を整理してみよう。

ここはクラブハウスの僕の部屋。時間は夜の１１時くらい。僕は丁度シャワーを浴び終えて寝ようとしていたところだった。放課後の補習が長引いてけっこう疲れたので早く寝ようとしたら……カレンがやってきた。

そして現在に至る……

深夜。密室で二人っきり。風呂上り。自分と同じ歳の、しかも美女。おまけに薄着。すぐ傍にベッド。

まるで夜這いみたいですね……夜這い？　ヤバイのかこの状況！？

落ち着け！　まだ決まったわけではない！　簡単に決め付けるな！！

早まったまねをするわけにはいかない！！　冷静に現状を把握しろ……！！

ちなみにここまでの思考時間、１．５秒。

「どうしたんだいカレン。何かあったの？」

「……その、怖くて……」

カレンが体をもじもじさせながら訴えてきた……もう、この動作だけでも、どんなことでも許してしまいそうだ。

「何が怖いんだ？　夢でも見たのか？」

「夢じゃなくて……その、放課後のスザクが……」

……スザク、少し頭冷やそうか？　貴様、カレンに何をした！？いいだろう。彼女の話を聞き次第、貴様の処罰を決めてやるとしよう。

―――現在、説明中―――

「まとめると……今日の生徒会で怪談話をしたと」

「うん」

今は夏。そしてミレイさんが夏といえば定番の怪談話を提案したらしい。

そしてその中でも、日本の怪談を良く知っているスザクが代表ということで何個もの怪談話をしたという。

「……それで、寝ようとしたら怖くなってきたと」

「目をつぶったら……何か見えるようで……」

スザク、今度は僕とゆっくりＯＨＡＮＡＳＨＩしようじゃないか。カレンに恐怖を植え付けるとか……よほど死にたいらしいな。ルルーシュがかつて彼のことを『死にたがり』と表現していたが、どうやら本当のようだ。

安心してくれよ。僕は決して君を死なせたりはしない。死ぬ痛みを味わってもらう。

まあ何にせよ、どうやらカレンは一人で寝れないからここに来た

だけのようだ。
……だよね。最初からわかっていたよ僕は。変な想像なんてまったくしていなかったよ。

「……じゃあカレンはベッドを使って。僕は床で寝るから」
「！　駄目……傍にいて！」

カレンが震えながら僕の腕を掴む……それほど怖かったのか？

「……まさか、本当に二人でベッドに？」
「……うん」
「……でも、さすがに男の僕がカレンと一緒に寝るのはちょっと……」
「お願い……」
「カレンは大丈夫？」

「ライなら……信じられるから……」

……これで断るのはさすがに男としてどうかと思う。布団は予備の分もあるし問題はないが……しかし大丈夫か？
僕のほうが朝までちゃんともつだろうか？　いや、ここでカレンの期待を裏切るわけにはいかないし……

「じゃ、じゃあ僕は逆側を向いているから……」

「うん……おやすみなさい、ライ」

「おやすみ、カレン」

電気を消し、僕達は眠りについた……つこうとしたんだけど……

「……」

「すぅ……」

眠れない……眠れない！　眠れるわけがない！！　後ろにカレンがいると思うとそれだけで緊張してまったく眠れない！
なのにカレンからは無防備な寝息が聞こえてくるし……これは僕が男として見られていないのか、それとも信用されているということなのか……後者だろう。きっとそうだ。そうに違いない！　そうでなければならない！！

「んん……」

「！！」

……カレンが後ろから抱き着いてきた。僕を抱き枕と思っているのかもしれない。
お互いの体温が通じ合って、ぽかぽかと暖かい。いや、それだけならまだいいんだが……背中に何か、カレンのやわらかいものがあたっている！

夏ということもあり、カレンの寝巻きもかなり薄いものだった。そのせいもあって、背中の感触がやけに強く感じる。

（ヤバイ……ヤバイ！）

僕だって男だ。カレンのような女の子と二人っきりで、しかもお互いに密着しあっていれば当然体が反応がしてしまうわけで……

（駄目だ！！　とにかく、なんとか抜け出さないと！　せめて手だけでも！）

この試練から抜け出すためにも、僕はカレンの腕へと手を伸ばす。それほど力もかかっていなかったので、意外と簡単に抜け出せた。

（……危なかった。早くもカレンの期待を裏切るところだった……）

ベッドから体を起こしてつかの間の休息を味わっていたのだが、突然カレンが僕の腕を掴んできた。

「！　……カレン？」

「……行かないで、お母さん……お兄ちゃん……」

「……！」

「ライ……！」

……夢を見ているのか？　カレンが家族や僕の名前を呼んでいた。彼女がうなされるなんて想像もできなかったが、今思えば彼女も家族を奪われてきたんだった……

……僕はベッドに戻り、カレンのことをそっと抱き寄せた。

「大丈夫。僕はどこにも行かないから……最後まで、カレンの傍にいるから。安心しておやすみ」

「……」

言葉が通じたのかはわからない。でも、カレンははにかんだように微笑んでいた。

学園の演技の顔でもなく、戦場の張り詰めた時の顔でもなく、年

相応の少女の顔。

「……ライ」

「！！」

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ！

カレンも僕の背中に腕を回し、体を引き寄せてきた。そして僕の耳元にカレンの無防備な吐息が吹きかけられた。僕の胸板にはカレンのやわらかいものが押し付けられ、その形を変えている。

この状況はヤバイ！　超絶的にヤバイ！

何度も言うが、僕もれっきとした男である。当然男性としての欲もあり、ホモサピエンスのオスが総じて逃れられない生理的な反応を起こす現象もある。

このように好意を抱いている女の子にこのような誘惑するような行動をされたりしたら……

「……んっ……はぁっ……」

（僕のハドロンブラスターが……まさに臨戦態勢に入ろうとしている！）

なにがヤバイのかというと、それは先ほどのように背中合わせになっているのではなく、向かい合っているということだ。
もしもハドロンブラスターの砲撃準備が完了すれば、これほど身近にいるカレンに狙いを定めないわけがない！　というか、発射口が衝突する！　何と衝突するかは聞かないで。

駄目だ！　耐えろライ！　気合で持ちこたえるんだ！

安心して、信頼して僕に身体を預けてくれているカレンに対し、微笑んでいる彼女に対し、その期待を裏切る行為が許されるわけがない！　許されてはいけない！

お前になら出来るはずだ……賢者になるんだ……！！

鋼の理性が、男の本能なんかに負けるわけにはいかない！

……結局、僕の孤独な戦いは、部屋に朝の日差しが差し込むまで続いた。

「うーん、よく寝たー！」

「……そっか。それはよかった……」

彼女の無邪気な笑顔を見たとき、自分との長き戦いに終止符が打たれたことを……そして、自分に勝利を収めたことを身をもって感じた。

あの後もひどかった。僕が落ち着いてなんとか寝ようとするタイミングで、寝言で何回も「……んっ……はぁっ……」とか色っぽく囁いたり、終いには手だけでなく足まで絡めてきて僕の逃げ場所を完全になくしたりするから……本当にやばかった。正直なところ襲いそうになったことが何度もあった。

……だけどカレン。僕は何もしていないのだから、「ライ……だめ……」という囁きはしないで欲しい。むしろしてしまいそうになる。

（だが、僕は確かに勝った！　勝ったんだ！）

【ギアスという王の力はお前を孤独にする】というが、まさにその通りだった。本当にあれは孤独の戦いだった。

眠くて死にそうだが、今の僕は達成感と勝利の喜びに満ち溢れている。僕はカレンの信頼を守りきったんだ！

もっともこんな苦労はもう二度とごめんだが……いや、カレンと

寝るのは大歓迎なんだけど……もっとこう、ちゃんとした状況（シチュエーション）で、カレンもちゃんと起きた状況で……

「ねえライ……今夜も、一緒に寝ていい？」

「……え゛」

「あ……だ、だめだった？」

「……いや、大丈夫だよ。カレンならいつでも」

「ありがとう」

僕がそう言うと、カレンは照れたように微笑んで……僕の頬にキスをした。

……前言撤回。あんな風にお願いされたら断れるはずない。可愛すぎるじゃないか、もう。

ちなみに今日学園に登校したときに、このような状況を作ってく

れたスザク君にはしっかり、たっぷりお礼をしました。

番外編　理性ＶＳ本能（後書き）

ｓｔａｒ「復活！！」

ル「……スザクが犠牲になったがな」

ラ「尊い犠牲だよ。無駄ではない」

ｓｔａｒ「（無駄だった気もするが……）みなさん本当にお久しぶりです！

再び執筆活動がんばります！　またよろしくお願いします！」

番外編　生徒会室にて（前書き）

……時間軸はまたしても一期。

読むにあたって、いろいろ注意してください。

番外編　生徒会室にて

「ふぅ、ようやく終わったか……」

教室で一人呟くルルーシュ。本来なら生徒会の仕事のためにすでに生徒会室にいるはずなのだが、出席日数が危ないということで今日は補修をうけていた。

最も、それでもミレイが書類を溜めていたためにこうして生徒会室に向かっているわけだが。

「まったく、会長も相変わらず人使いが荒い……ん？　あれはリヴァルに会長？　何をしてるんだ？」

見ると、ミレイとリヴァルが生徒会室に入らずにドアに張り付いていた……つまり聞き耳を立てていた。

ちなみに生徒会メンバーのうち、スザクは軍の仕事、ニーナは課外、シャーリーは水泳部、ナナリーは検査のため病院へと行っているため、今この場にはいない。

「リヴァル、会長まで何をしているんですか？」

「シーーーッ！　ルルーシュ静かに！」
「ライとカレンが今中にいるんだから！！」
「……なぜ中に入らないんですか？」
「お前も聞いてみれば分かる！」

二人の言葉に疑問を感じつつ、ルルーシュもドアに耳を近づける。
すると室内の二人に声が聞こえてきた。

『どう、ライ？　気持ちいい？』
『うん、すごく気持ちいい。」
『それじゃあ、こういうところは？』
『！！？　ッ、うん、すごくいいよ…』
『ふふっ、ライもそういうかわいらしい声出すのね……』
『カレン、もういいから……』
『だめよ、ちゃんと最後までやらないとっ！！』
『ッ！！　ああ！！』

「！！？　な、な、（まて、なんだ？ナニをしているんだこいつらは！？　……いや待て。会話だけならまだ２２通りのパターンの可能性が……）」

「な、さっきからこんな感じなんだよ」

リヴァルがルルーシュに声をかけるが、イレギュラーに弱いルルーシュは情報を整理するのに精一杯なので、彼の声はまったく届いていない。

『じゃあライ、ソファに寝て。踏んであげるから』

『……うん……！』

『痛かった？』

『いや、大丈夫。そのまま……』

「（まてまてまてまて。何だ？　いつからライは受けになった？）」

「カレンもやるわね～」

「……何のんきなこと言ってんですか」

『それじゃ今度は私が上になるから…』

「（馬鹿な！！　カレンが完全に攻めに転じるだと……！）」

学園では猫をかぶっておとなしくしているはずのカレンがやけに積極的にやっている。この状況にルルーシュの頭はすでにオーバーヒートしていた。

「私達が入ろうとしたら、会話が聞こえてきちゃって……」

「……お前、この中に入っていけるか？」

「無理だ」

ルルーシュが即答する。さすがにそこは全員の意見が一致した。この三人の意見が揃うというのもけっこう珍しい。

しかし、一同が話をしている間も中の事態は進む。

『もうライったらこんなに堅くしちゃって……誰かにやってもらったりしたこと無いの？』

『ないよ、カレンが初めてだから……』

『あ、そうなんだ……』

「（初めて！？　ライ、お前初めてだったのか！？まさか、これは本当に……いや待て、まだ3通りの可能性が…」

ルルーシュはもうすでに混乱状態に陥った。さすがはイレギュラーに弱い男。普段は冷静なくせに、こういうときはまったくの役立たずである。
というか、その3通りとは一体何があがっているのかが気になるところだが……それはルルーシュの尊厳のために聞かないで欲しい。

『でも、本当にだめよ。こんなにたまってるし……言ってくれれば私が毎日してあげたのに……』

「（待てカレン！！　それではライの体がもたない！！）　もうだめだ！　おい、お前達一体何をしている！？」

このままでがライがカレンによって生気も性気も吸いとられてしまう。そう考えたルルーシュはついに限界が突破し、ドアを開けた……が、

「へ、ルルーシュ来てたの？」

「会長にリヴァルまで…」

……たしかにカレンはライの上に乗っていた。
だがライはうつぶせであり、カレンが乗ってる場所もライの上半身だった。また、二人ともちゃんと服を着ている。

「……？」

「いや今来たところ。それで何やってたんだ二人で……」

イレギュラーに弱く、無言のまま固まったルルーシュに代わり、リヴァルが質問する。

「カレンにマッサージをしてもらってたけど？」

「マッサージ？」

「ええ、最近ライも疲れが溜まってたみたいだから…」

「（たしかに、ライは最近騎士団との二重生活がつらくなっていたように見えた）……ではカレンが上に乗ると言ったのは？」

「上半身のマッサージをするためだけど？」

カレンがさも当然の様に答える。

「……なんでライを踏んだんだ？」

「足踏みマッサージ」

「……ライに堅いと言ったのは？」

「だってライったらマッサージしてもすぐ筋肉を堅くしちゃうんだもん。」

「いや、他人にマッサージしてもらう機会なんてなくて…」

「……何が溜まってるって言ったんだ？」

「疲れが」

ルルーシュの疑問は全て打ち落とされた。

＊＊＊忘れそうですが、ライは１００年前まで戦いの毎日でした。現代で目覚めても、そういう機会は全くありませんでした。＊＊＊

自分達の誤解に気付き、苦笑いしかできなかった……ただ一人を

除いて。

「フフフフフ、フハハハハ、アハハハハハハッ！」

「！？　ど、どうしたルルーシュ？」

「……頭でもおかしくなったの？」

「まぁ、二人とも気にしないであげて。私達がルルーシュを抑えるから…」

この日から約1週間、ルルーシュは学園を休み、ゼロもまた戦場に現れなかったという。

番外編　生徒会室にて（後書き）

ｓｔａｒ「ねえねえルルーシュさん。一体何を考えていたんですか？」

ル「……」

ｓｔａｒ「黙ってないで私に教えてくださいよ。ねえ？」

ル「！　お前は黙っていろ！！」

ｓｔａｒ「しまっ……！」

ラ「ギアス発動！？

……えー、作者が話せなくなってしまったので、僕が代わりに。今日もありがとうございました。先に言っておきますが、僕は受けではないのでご注意ください」

ｓｔａｒ「（何言ってんのライ！？）」

番外編　演説（前書き）

一期が時間軸なんですが……いつも以上にめちゃくちゃです。
ご注意ください。

番外編　演説

全世界へと報道されるのは、この世界の3分の2を手に入れた大国の皇帝の演説。

その壇上に上がることが許された世界で唯一の人物――シャルル・ジ・ブリタニア。

今日もブリタニア人ならば、全員がどこにいようともその皇帝の演説に耳を傾けなければならない。

そう。たとえ、その演説がどんな内容であろうとも……

『人間は平等ではない……』

常に人民の差別化をはかり、争わせることでさらなる進化を体現してきたブリタニア。

皇帝の演説は常にこの言葉から始まる。常に人民に『弱肉強食』の信念を芽生えさせようとする。

『生まれつき顔が美しい者、醜い者、スタイルが良い者、人間性がある者、生まれも育ちも才能も……人間は皆、違っておるのだ！そう、人は、差別されるためにある！！』

背中のスクリーンに様々な映像が流される。
告白に成功し喜ぶ者、失敗し絶望に沈む者、モデルとなっている者、彼女を自分の家へとあげる者、ホテルへと連れて行く者……様々な者達が。

『リヴァル・ガルデモンドはどうだ！？　最後まで想い人を追いながらも、その思い届くことなく、最後まで尻にしかれる始末！！』

映像が変わり、なぜかエリア11・アッシュフォード学園の日常、並びに生徒会の映像が流される。
その中ですべてに映っている男――リヴァル・ガルデモンド。

……今この瞬間、彼は全世界の人間からまったく嬉しくない同情を得た。
ちなみに本人はその場で崩れこみ、そして泣いた。男泣きに。体育館の同級生達は彼を哀れみの目で見ている。

『枢木スザクはどうだ！？　１期でこそ我が娘・ユーフェミアと良い関係にまで及んでおきながら、２期ではまったくそのような話はなく、仕舞いにはウザクとまで呼ばれる始末！！』

再び映像が変わり、今度はスザクの映像が流される。
最初はユーフェミアとの交流が流れていたが、途中からは戦闘の映像のものだったり、カレンによって完膚なきまでに打ちのめす映像が流れた。

……ちなみに、リフレインの映像まで流れたために、本人はライのサンドバッグと化している。

『だが、我がブリタニア皇族は違う！　シュナイゼルを見よ！！
その顔つきと紳士的笑みにより、多くの女性を虜にした！！』

今度はシュナイゼルの映像は流れる。
穏やかな笑みを絶やすことなく、次々と女性の手をとっている。
本人の腹黒さには全く関係なく、その笑みに多くの女性が惹きつけられている。

『ルルーシュを見よ！！　このような戦況下で、最愛の妹・ナナリーがいながらも原作ですでにシャーリー、Ｃ．Ｃ．、カレンと言った三大ヒロインの同時攻略を試みた！！』

次に出てきたのがルルーシュ。学園での、騎士団での、皇帝での……様々な姿ではあるが、女性と共に映っている姿が出ている。

当の本人は、「なぜ……なぜあの男がゼロの写真を持っている！？」などと混乱に落ちているが。

……イレギュラーに最も弱い男。それがルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。

『ライは見よ！　ロスカラをプレイしなおすごとに、カレン、Ｃ．Ｃ．、千葉、ナナリー、シャーリー、ミレイ……ｅｔｃ　など、幅広い守備範囲で多くのｅｎｄを再現した！！』

そして我らが主人公・ライ。

ロスカラで使用されたグラフィックがなぜかそのまま流されている。

……ブルームーン編まで入れたら、その攻略してきた数は計り知

れない。なぜなら……女性ではない者までいるからだ。

『わしを見よ！！　わしの妻は１０８人までおるぞ！！　毎夜、相手を選んでおる！！』

そして最後に皇帝自身の……そして１０８人の妻の写真が表示された。

……だれか、今すぐこの皇帝殺してくれ。もう不敬罪なんて関係ないから。

『ブリタニアだけが前へ！　未来へと進んでいるのだ。　闘うのだ！　競い、奪い、獲得し、支配し、その果てに、未来（ハーレム）がある！！　オール・ハイル・ブリタニア！！！！！！』

こうして、今日も皇帝の演説が終わった……

―――――――

「なんで……なんでこんなことに！！」

「まったくだ……あのロールケーキが……！！」

二人とも、心の中では全く同じことを考えていた。
このような事態を作り出したその元凶を……

「ルルーシュ……僕は決めたよ」

「そうか……俺もだ」

二人は一度立ち止まり、そして決意のこもった目で誓った。

「「ブリタニア皇帝を、ぶっ殺す！！」」

……皮肉にも、この日はかつてルルーシュがブリタニアの破壊を宣言した日とまったく同じ日だった。

番外編　演説（後書き）

「「「……」」」

ｓｔａｒ「１０８人って、どう思う？」

ラ「……何もいえない」

ｓｔａｒ「毎日やったとして、一日ごとに相手を変えたとしても……１年中に同じ人とやるのは３，４回という計算に……」

ル「そんな嫌な計算するな！」

ｓｔａｒ「しかも実際はそんなに体がもたないだろうから……本当は２年に一回とかなのかな？」

ラ「……いくらなんでも多すぎるよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9703v/

宿命に抗いし反逆者　番外編

2011年11月26日19時52分発行